



「各教科等を合わせた指導」 ガイドブック

子どもたちの笑顔が輝く授業を目指して

京都府総合教育センター 特別支援教育部

平成 26 年 3 月

はじめに

京都府立支援学校の授業実践を拓く

京都府では、現在 11 校と 4 分校（1 分校休校）の支援学校と小・中学校合わせて 495 学級の特別支援学級で子どもたちが学んでいます。

養護学校義務制以降 34 年。特別支援教育への転換に伴い、養護学校が地域のセンター的機能を期待される特別支援学校となって 7 年。各校が地域に根ざし、特色ある実践が積み重ねられてきました。

一方で、教職員の大量退職期を迎え、新規採用者や若い教員も急激に増えました。毎年初任者研修で出会う若手教員の率直な意見の中には、「個のニーズに合わせた授業づくりが難しい」、「学校や地域による違いが大きい」といった声があり、不安の一つとなっているようです。また、京都府立支援学校各校教員の年齢構成などから、京都府立支援学校として今求められる実践を追究し、検討する期待が寄せられました。

そこで、各府立支援学校が大切にしてきたこれまでの実践を振り返り、新しい時代になっても大切なことを確認しつつ、どの学校に勤務しても変わらない教育課程の基本を改めて確認し合い、共通認識のもと各校の実践が豊かに深められることを目指して、各府立支援学校全校及び地域の小・中学校の先生方に研究協力を依頼し、「各教科等を合わせた指導」に関する研究プロジェクトを立ち上げました。

各校の研究・実践リーダーによる授業研究は、スタンダードを示すだけでなく、具体的な授業実践を提示し、各校内で進められる授業研究や若手教員の参考となるようまとめました。

また、情報機器の活用が進められることを願い、研究にはタブレット P C の活用も意識して取り入れました。

各校の授業研究を深めていただく一助として、是非ご活用ください。

京都府総合教育センター 特別支援教育部

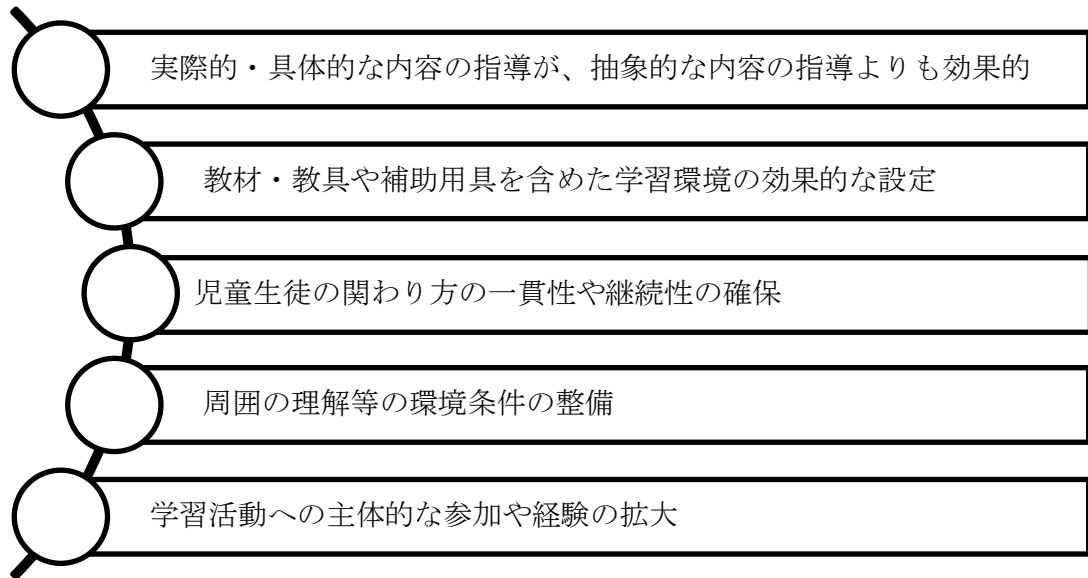
各教科等を合わせた指導ガイドブックの構成

各教科等を合わせた指導とは	各教科等を合わせた指導	各教科等を合わせた指導の授業モデル	まとめ
・知的障害のある子どもたちの特徴 ・知的障害のある児童生徒への基本的な指導の進め方 ・知的障害のある児童生徒の教育課程	・日常生活の指導 ・遊びの指導 ・生活単元学習 ・作業学習 ・各教科等を合わせた指導の課題 ・point of view	・遊びの指導 ・生活単元学習	・資料 ・指導助言 ・おわりに ・参考文献



知的障害のある子どもたちの特徴

学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活に応用されにくいことや、成功経験が少ないことなどにより、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないことがみられます。また、実際的な生活経験が不足しがちであるとともに、抽象的な内容より、実際の・具体的な内容の指導が効果的です。



引用：特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（幼稚園・小学部・中学部）

コラム① 知的障害のある子どもたちの教育

1. 人は生まれながらにして分かろう・学ぼうとする存在である
2. 自分が変わることなしに子どもを変えることはできない
3. 相手の活動文脈を読む（相手の良いところを見つける）
4. 振り返りながら子どもと一緒に活動は繰り返す
5. 自分ができないことを子ども・障害のせいにならない



例えば、先生が、知的障害のある子どもに、足し算を教える。
しかし、子どもは足し算ができない。

この時、その子どもに見合った方法をみつけられないでいる先生自身に指導上の課題があるということが言える。

この指導上の課題の克服には、先生が子どもに見合った方法を見つけることが大切である。



子どもは、
変容し、成長していく存在
教師は、
「過程的」な存在
子どもの行動の意味や内面の文脈
(気持ち)を読みとる力量が必要

知的障害のある児童生徒への基本的な指導の進め方

1. 児童生徒の実態等に即した指導内容を選択・組織する。
2. 児童生徒が自ら見通しをもって行動できるよう、日課や学習環境などを分かりやすくし、規則的でまとまりのある学校生活を送れるようにする。
3. 望ましい社会参加を目指し、日常生活や社会生活に必要な技能や習慣が身に付くよう指導する。
4. 職業教育を重視し、将来の職業生活に必要な基礎的な知識や技能及び態度が育つよう指導する。
5. 生活に結び付いた具体的な活動を学習活動の中心に据え、実際的な状況下で指導する。
6. 生活の課題に沿った多様な生活経験を通して、日々の生活の質が高まるよう指導する。
7. 児童生徒の興味・関心や得意な面を考慮し、教材・教具等を工夫するとともに、目的が達成しやすいように、段階的な指導を行うなどして、児童生徒の学習活動への意欲が育つよう指導する。
8. できる限り児童生徒の成功体験を豊富にするとともに、自発的・自主的な活動を大切に、主体的活動を促すよう指導する。
9. 児童生徒一人一人が集団において役割が得られるよう工夫し、その活動を遂行できるよう指導する。
10. 児童生徒一人一人の発達の不均衡な面や情緒の不安定さなどの課題に応じて指導を徹底する。

指導内容の 選択・組織	見通しの もてる日課	必要な技能 や習慣	職業教育の 重視	生活に結び 付いた具体 的な活動	多様な 生活経験
教材教具の 工夫	段階的な 指導	豊富な 成功体験	主体的活動	役割	課題に応じ た指導

Check point

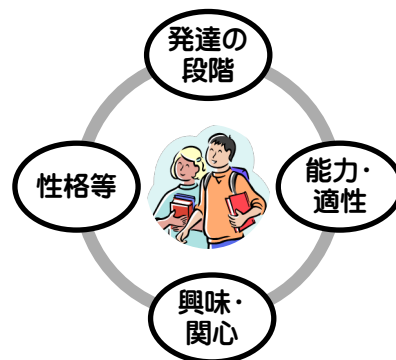
個に応じた指導方法

子どもたちはそれぞれ障害の状態及び発達の段階、能力・適性、興味・関心、性格等が異なっており、また、知識、思考、価値、心情、技能、行動等も異なっています。

子どもたちが学習内容を自分のものとして働かせることができるように身に付けるためには、教師はこのような個々の子どもの障害の状態及び発達の段階や特性等を十分理解し、それに合った指導を行うことが必要です。

個に応じた指導方法として、「個別指導の重視」と「授業形態や集団の構成の工夫」があります。

子どもたちの実態、学校の実態等に応じて、学校が一体となって工夫改善を進めていくことが重要です。



授業形態 の工夫

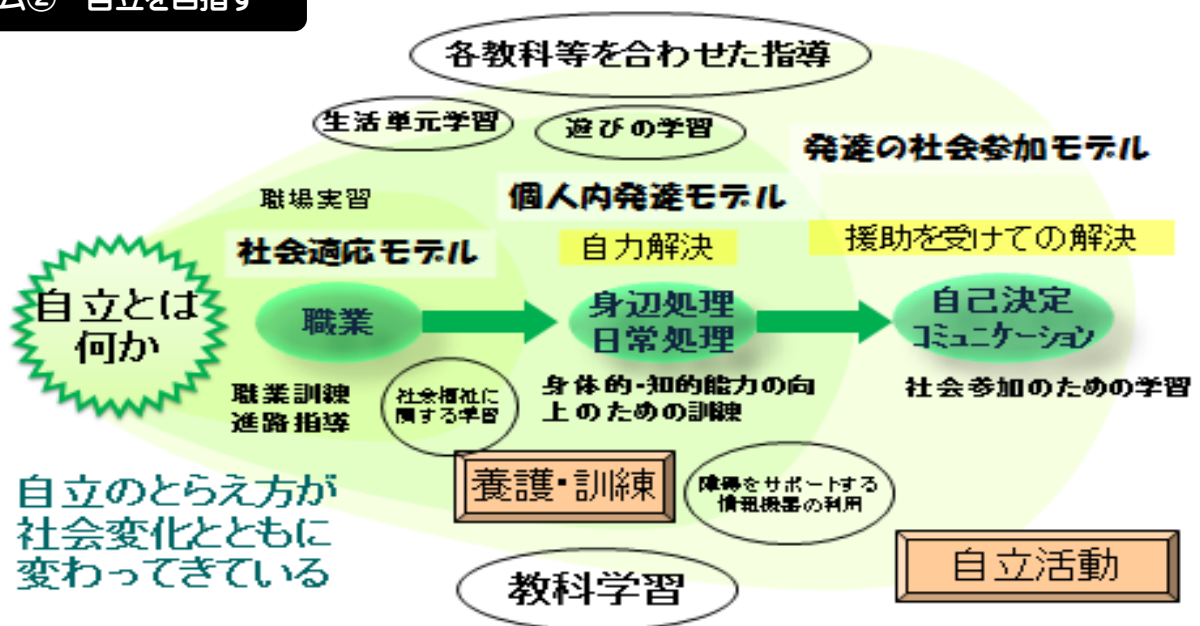
- ・ティームティーチングによる個別指導
- ・学級等の枠を外したグループ別指導

集団の構 成の工夫

- ・習熟度に応じたグループ編成
- ・障害の状態に応じたグループ編成

引用：特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（幼稚園・小学部・中学部）

コラム② 自立を目指す



自立とは何か？これは時代と共に変わってきています。

支援学校が義務化される前、自立は「職業訓練」、「社会参加していく力」と考えられていました。社会参加していくには、自立していくには、職業をもって自活していかなければなりません。これが自立の始まりです。

それが、支援学校が義務化されて、将来職業をもつことが難しい障害の重い子どもたちも入学してくるようになりました。そういう中で、「障害」や「自立」の考え方が少しずつ変わってきました。その子どもたちにとって「自立とは何なのか？」を考えたときに、「自分のことは自分でできるようになる」ことが、その子どもにとっての自立です。当然、「その子どもの身辺処理というものができるように支援していく」、「自分の力で自分のことはできるように支援していく」が自立の中心になってきます。つまり、ADL (activities of daily living) が自分でできるようになるということです。そのための訓練が学校教育の中で行われるようになったのです。そして、さらに障害の重い子どもたちが入学してくるようになりました。ずっと身辺処理ができないかもしれません。その子どもたちを含めて自立を考えていく上で、出てきた答えが、「自己決定できる力」、「コミュニケーションしていける力」でした。

ここで言う自己決定とは、「自分で解決することではない。自分では決められることもできないことはたくさんある。他の人の助けを借りて自活していく。そういうことも含めて自立と考えていこう。」というものです。

このように自立の考え方は、上記の図の左から右へと変わってきました。しかし、形成過程は逆です。つまり自立というのは、まず自分から社会に向かって、求めようとする関心、皆がやっているように自分も社会に出て行きたい、お店に行きたい、散歩に行きたいなど、社会に向かって関心をもつことができる力を育成していくことが一番のベースです。それに向かって自分から訴える力、そういった機能を磨いていくということも必要となります。社会の側から見ると受信できる、受け入れることができる社会基盤を整えるということがベースになります。その上で、身辺処理、「職業訓練」の2つは、訓練的要素がたくさんあります。繰り返し身に付けていくということが含まれているのです。

身辺処理をするというのは、「社会に関心があって、社会に向かって発信する技量があって、日々社会参加したいから、身辺処理をしたい」ということが前提にあります。

「職業訓練」をするというのは、「社会に関心があって社会に出て行きたい。日常そのものが社会参加している。そして、自分も職業を持って社会に出て行きたい。」というところに「職業訓練」の意味があると考えられます。

知的障害のある児童生徒の教育課程

知的障害のある児童生徒の教育については、児童生徒の障害の状態に即した指導を進めるために、各教科等・道徳、特別活動及び自立活動のそれぞれの時間を設ける場合と、各教科等の全部又は一部を合わせた授業（各教科等を合わせた指導）を適宜組み合わせ、指導を行う場合があります。

各教科等、道徳、外国語活動（小学校）、特別活動及び自立活動の全部又は一部について合わせて授業を行うことができます。

特別支援学校においては、この各教科等を合わせた指導を行うことが効果的であることから、多くの学校で実践されてきています。「各教科等を合わせた指導」として4つの形態があります。（児童生徒の実態に応じた教育課程として独自に形態を設ける場合もあります。）

学校教育法施行規則第126条2

知的障害者である児童を教育する場合は、生活、国語、算数、音楽、図画工作及び体育の各教科、道徳、特別活動並びに自立活動によって教育課程を編成するものとする。

学校教育法施行規則第127条2

知的障害者である生徒を教育する場合は、国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育及び職業・家庭の各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動並びに自立活動によって教育課程を編成するものとする。ただし、必要がある場合には、外国語科を加えて教育課程を編成することができる。

学校教育法施行規則第128条2

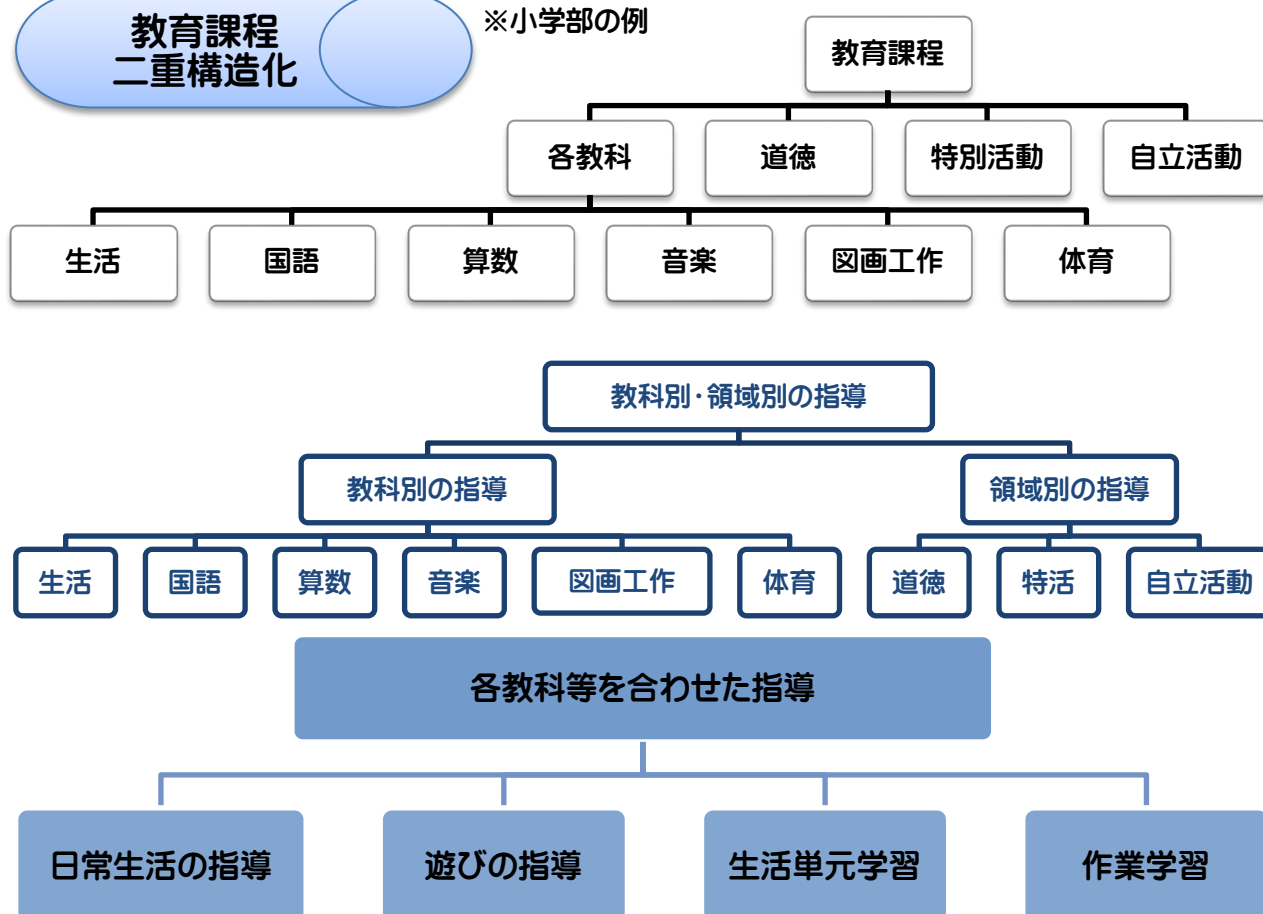
知的障害者である生徒を教育する場合は、国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、職業、家庭、外国語、情報、家政、農業、工業、流通・サービス及び福祉の各教科、第百二十九条に規定する特別支援学校高等部学習指導要領で定めるこれら以外の教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動並びに自立活動によって教育課程を編成するものとする。

学校教育法施行規則第130条2

特別支援学校の小学部、中学部又は高等部においては、知的障害者である児童若しくは生徒又は複数の種類の障害を併せ有する児童若しくは生徒を教育する場合において特に必要があるときは、各教科、道徳、外国語活動、特別活動及び自立活動の全部又は一部について、合わせて授業を行うことができる。

教育課程 二重構造化

※小学部の例



コラム③ 教科別の指導とは

教科別の指導とは、時間割の中に各教科の時間を設けて指導することです。

指導を行う教科やその授業時間数の定め方は、対象とする児童生徒の実態によって異なり、一人一人の子どもの障害の状態や発達段階に応じて教科別の指導を展開します。

3つの要素を十分に考慮した内容を選択、組織することが大切となります。



教科別の指導の3つの要素

児童生徒の実態に即して、生活に即した活動を十分に取り入れつつ段階的に指導する必要があることやそれぞれの教科の特質や指導内容に応じて小集団を編成し個別的な手だてを講じるなどして、個に応じた指導を徹底する必要があります。

特別支援学校（知的障害）の各教科の内容は、知的障害の状態等に配慮し、基本的には下図などの状態を考慮して目標や内容を定めています。また、対象とする児童生徒の学力等が同一学年であっても知的障害の状態や経験等が様々であり、個人差が大きいため、学年別ではなく、段階別（小学部3段階、中学部1段階、高等部2段階）に示され、6段階に積み上げています。

考慮点						
知的発達	身体発育	運動発達	生活経験	社会性	職業能力	その他

各教科の各段階の考慮点

段階	各段階の内容
小学部1段階	・障害の程度が比較的強く、他人との意思疎通に困難があり、日常生活を営むのにほぼ常時援助が必要とする者を対象とした内容を示している。 ・知的発達が極めて未分化であること、生活経験が少ないことなどから、主として教師の直接的な援助を受けながら、児童が体験したり、基本的な行動の一つ一つを着実に身に付けたりすることをねらいとする内容を示している。
小学部2段階	・障害の程度は、上記ほどではないが、他人との意思疎通に困難があり、日常生活を営むのに頻繁に援助を必要とする者を対象とした内容を示している。 ・主として教師からの言葉掛けによる援助を受けたり、教師が示した動作や動きを模倣したりするなどして、児童が基本的な行動を身に付けることをねらいとする内容を示している。
小学部3段階	・障害の程度が比較的軽く、他人との意思疎通や日常生活を営む際に困難さが見られるが前段階の程度までは達せず、適宜援助を必要とする者を対象とした内容を示している。 ・主として児童が主体的に活動に取り組み、社会生活につながる行動を身に付けることをねらいとする内容を示している。
中学部1段階	・中学部は、小学部3段階の内容の程度を踏まえ、生活年齢に応じながら、主として経験の積み重ねを重視するとともに、他人との意思疎通や日常生活への適応に困難が大きい生徒にも配慮しつつ、生徒の社会生活や将来の職業生活の基礎を育てることをねらいとする内容を示している。
高等部1段階	・中学部の内容やそれまでの経験を踏まえ、主として卒業後の家庭生活、社会生活及び職業生活などを考慮した、基礎的な内容を示している。
高等部2段階	・高等部1段階を踏まえ、比較的障害の程度が軽度である生徒を対象として、発展的な学習内容を示している。

これらの各教科については、内容を概括的に示していることから、各学校が指導計画を作成する際には、児童生徒の知的障害の状態等、学校や地域の実態等に即して、各教科の内容を具体化し、指導内容を設定する必要があります。

引用：特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（幼稚部・小学部・中学部）

引用：特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（高等部）

各教科等を合わせた指導

「各教科等を合わせた指導」は、知的障害のある子どもの教育の独自の指導形態であり、知的障害の特性を踏まえた効果的な指導である。児童生徒の知的障害の状態や経験等に応じて、具体的に指導内容を設定するものとされています。

障害のある児童生徒は、学習によって得た知識が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくいことや、成功体験が少ないことなどにより、主体的に取り組む意欲が十分に育っていないこと、実際的な生活経験が不足しがちであることから、実際の・具体的な内容の指導が必要です。こうしたことから、「各教科等を合わせた指導」が特別支援学校では重視されています。

「各教科等を合わせた指導」では、一人一人の児童生徒の実態に即して、選択・組織された指導内容に沿って目標を設定しています。各教科等の相互の関連を図りながら、系統的、発展的に学習を展開・評価を進める必要があります。

日常生活の指導

日常生活の指導は、児童生徒の日常生活が充実し、高まるように日常生活の諸活動を適切に指導するものです。

日常生活の指導は、生活科の内容だけでなく、広範囲に、各教科等の内容が扱われます。小学部の多くは、生活科に示された観点を中核的な内容としながら、さらに広範囲な内容が取り扱われます。＜例＞

衣服の着脱・洗面・排せつ・食事などの基本的な生活習慣の内容、あいさつ、言葉遣い、決まりを守ることなどの日常生活や社会生活において必要な基本的な内容など

指導に当たって考慮する点

- ① 日常生活の自然な流れに沿い、その活動を実際的で必然性のある状況下で行うものであること
- ② 毎日反復して行い、望ましい生活習慣の形成を図るものであり、繰り返しながら、発展的に取り組むようにすること
- ③ できつつあることや意欲的な面を考慮し、適切な援助を行うとともに、目標を達成していくために、段階的な指導ができるものであること
- ④ 指導場面や集団の大きさなど、活動の特徴を踏まえ、個々の実態に即した効果的な指導ができるように計画されていること

引用：特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（幼稚部・小学部・中学部）

生活科とは

特別支援学校（知的障害）の小学部の各教科である「生活」は、小学校第1・2学年の各教科である「生活」と同じ教科名ですが、内容には大きな違いがあります。

特別支援学校（知的障害）小学部の「生活」は第1～6学年を通して履修でき、内容を3段階に分けて構成しています。

＜具体的な内容＞

「基本的な生活習慣」「健康・安全」「遊び」「交際」「役割」「手伝い・仕事」「きまり」「日課・予定」「金銭」「自然」「社会の仕組み」「公共の施設」の12の観点から構成されています。

特別支援学校学習指導要領解説に「生活の自然の流れに沿って指導することが重要である」と記述されているように、時間割の中で単独に位置づけるというよりも、「生活単元学習」や「日常生活の指導」等の中心的な教科として位置づけることとなります。

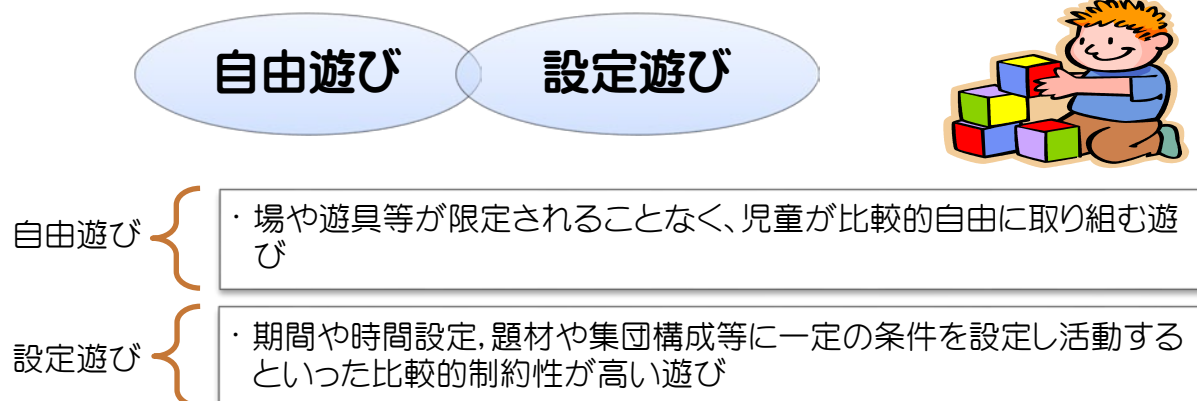


遊びの指導

遊びの指導は、遊びを学習活動の中心に据えて取り組み、身体活動を活発にし、仲間との関わりを促し、意欲的な活動を育み、心身の発達を促していくものです。

遊びの指導を子どもの発達を促す重要な活動として考え、小学部の低学年から中学年の教育課程に位置づけ、中核的な学習活動の一つとして取り組んでいる学校が見られます。また、遊びの指導の成果が教科別の指導等に生きることもあります。

遊びの指導では、生活科の内容をはじめ、各教科等に関わる広範囲の内容が扱われます。また、下図の2つの種類の遊びを連続的に設定します。



指導に当たって考慮する点

- ① 児童が積極的に遊ぼうとする環境を設定する。
- ② 教師と児童、児童同士の関わりを促すことができるよう、場の設定、教師の対応、道具等の工夫をする。
- ③ 身体活動が活発に展開できる遊びを多く取り入れる。
- ④ 遊びをできる限り制限することなく、児童の健康面や衛生面に配慮しつつ、安全に遊べる場所を設定する。
- ⑤ 自ら遊びに取り組むことが難しい児童には、遊びを促したり、遊びに誘ったりして、いろいろな遊びが経験できるように配慮して、遊びの楽しさを味わえるようにする。

引用：特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（幼稚園・小学部・中学部）

生活 「いろいろな遊び」

「生活」では、「いろいろな遊び」の他にも、「遊具の片づけ」、「公園や遊園地などの利用」などの内容もあります。

※その他にも、「音楽」「図画工作」「体育」などの教科でも取り扱われています。

段階	内容
1 段階	○教師や友だちと同じ場所で遊ぶ
2 段階	○教師や友だちと簡単な決まりのある遊びをする
3 段階	○友だちと関わりをもち、決まりを守って仲よく遊ぶ

Check point

遊びの指導の年間計画を立てる際には、4つの視点を踏まえて考えます。題材設定については、粗大運動や微細運動を踏まえたり、季節に応じたりと幅広い内容の設定が必要です。

内容に関しては、発達段階を十分考慮しながら生活の「遊び」に関する内容との関連付けも大切です。

また、個々の実態に応じて集団編成を工夫（学級集団、学年集団、異学年集団等）することも重要な要素です。



指導計画立案の視点

◆年間指導計画（例）

	期間	題材名	ねらい	担当
1学期	4/16（火） ～5/17（金）	桜の木の下で	・戸外に出ることで覚醒を促し、春の季節感を感じる。 ・人や提示物に気持ちを向け、見続けたり、追視したりする。 ・人の声や音に気持ちを向けて聞く。 ・雰囲気の変化に気づく。	〇〇 〇〇
	5/20（月） ～6/21（金）	ぼくらの「おみこし」を作ろう	・いろいろな素材の感触に気づく。 ・指導者と一緒に素材に触れたり、働きかけたりする。	〇〇 〇〇
	6/25（火） ～7/12（金）	しずくのぼうけん	・提示物や明暗の変化に気づき、気持ちを向ける。 ・水や海などの題材で、海の雰囲気を感じる。	〇〇 〇〇

参考：京都府立城陽支援学校（重心教育部）

コラム④子どもにとっての遊び

子どもは、「遊ぶために生まれてくる」とも、また「遊ぶことで子どもは育つ」とも言われています。それほど子どもにとって、また子どもの成長・発達にとって遊びは大切なものです。

子どもたちは自分から進んで素材や遊具に働きかけたり、教師や友だちと係わったりして遊びに夢中になり没頭して、遊びそのものを楽しみます。教師は子どもの遊びがより楽しくなるように、子どもの自発的な遊びがより活発になるように支援・指導をする必要があります。

教師にとっても、子どもと楽しく遊べたときの喜びは大変なものではないのでしょうか。逆にいくらがんばっても子どもと楽しく遊べたと感じられないとき、空しさといったものを味わうことになるのではないのでしょうか。



例えば、障害の重い子どもの場合、視覚に障害があるとする、たとえば楽しく遊んでいても教師の方を見てにつこり微笑むといったことが起こりにくいので、教師は子どもの楽しさを実感しにくいことがあります。また聴覚に障害があるとする、「楽しいね。」といくら話しかけても子どもに通じていないように感じてしまうことがあります。ですから、教師は子どもの心のうごきを読み取って、嬉しい、楽しい、悲しい、つまらないといった子どもの感情が上手に表現されるように、日常的に言葉がけをしたり、言葉に動作を重ね合わせたり、あるいは子どもの身体へ直接働きかけて、子どもの気持ちや感情を分かち合い、その表現を助ける必要があります。

私たちは誰でも、子どもの頃、夢中になって楽しく遊んでいたことを懐かしく思い出すことができるはずです。遊んでいるときに「こっちが大きい、こっちが小さい」などと遊びを通して何かを指導しようとする遊びは歪められます。教師は、「子どもを変える」のではなく「子どもが変わる」との立ち位置で、知らず知らずのうちに教師もその遊びに引き込まれるような遊びを子どもと一緒に創造してみる必要があるのではないのでしょうか。

生活単元学習

生活単元学習は、子どもが生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際、総合的に学習するものです。また、学習の中で広範囲に各教科等の内容が扱われます。

生活単元学習の指導では、子どもの学習活動は、生活的な目標や課題に沿って組織されることが大切です。また、特別支援学校小学部においては、児童の知的障害の状態等に応じ、遊びを取り入れた生活単元学習を展開している学校もあります。

指導に当たって考慮する点

- ①単元は、実際の生活から発展し、児童生徒の知的障害の状態等や興味・関心などに応じたものであり、個人差の大きい集団にも適合するもの
- ②単元は、必要な知識・技能の獲得とともに、生活上の望ましい習慣・態度の形成を図るものであり、身に付けた内容が生活に生かされるもの
- ③単元は、児童生徒が目標をもち、見通しをもって、単元の活動に積極的に取り組むものであり、目標意識や課題意識を育てる活動を含んだもの
- ④単元は、一人一人の児童生徒が力を発揮し、主体的に取り組むとともに、集団全体で単元の活動に共同して取り組めるもの
- ⑤単元は、各単元における児童生徒の目標あるいは課題の成就に必要なかつ十分な活動で組織され、その一連の単元の活動は、児童生徒の自然な生活としてのまとまりのあるもの
- ⑥単元は、豊かな内容を含む活動で組織され、児童生徒がいろいろな単元を通して、多種多様な経験ができるように計画されていること

引用：特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（幼稚部・小学部・中学部）

Check point

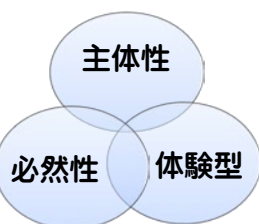
生活単元学習の単元構想を工夫しよう！！

単元構想の観点

- ①その時期の学校生活が充実し豊かになる単元
- ②一人一人が精一杯、めいっぱい取り組める単元
- ③仲間とともによりよく取り組める単元
- ④一人一人の思いに即し、思いを満たす単元
- ⑤どの子にもできる活動、できる状況を用意できる単元
- ⑥一定の期間、十分な活動に継続して取り組める単元
- ⑦生活年齢にふさわしい単元

単元構想を考える上で、8つの観点を踏まえる必要があります。

学習活動への意欲の高まりが、授業開始時及び単元開始時から展開、そして終末時に向かって高まっていくよう、単元計画を立てることが大切です。



単元設定に大切なこと

（参考資料：平成25年度特別支援教育＜発展＞サテライト「各教科等を合わせた指導」講座―自立する力を育むための授業づくり―京都府立宇治支援学校講義資料）

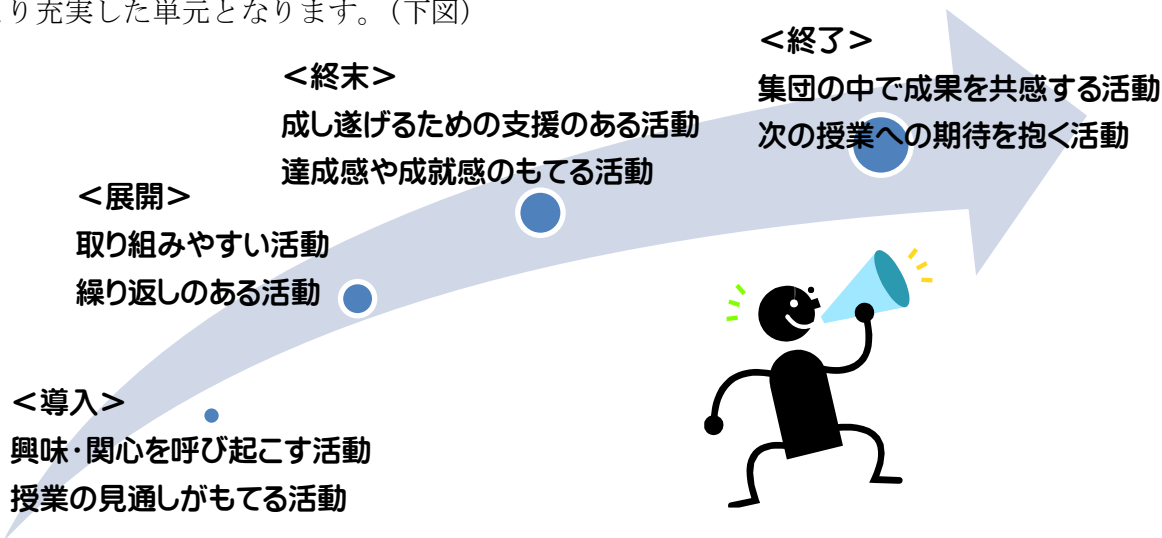
実際の生活に合わせた授業づくり

実生活を意識する

生活体験・経験を増やす

生活単元学習の配慮点

単元の中の活動では、導入～展開～終末～終了の展開を通して、活動や指導・支援の工夫をすることで、より充実した単元となります。（下図）



Check point

生活単元学習の年間指導計画を工夫しよう！！

日時	内容		
○/○	2学期の生単の流れを説明する。 災害についての導入をする。 学校の非常口を探そう。	導入	- 生活に結びつき、興味・関心 を呼び起こすテーマに基づ いた活動 - 単元の見通しのもてる活動
○/○	災害について知る。 調べる内容を班で決める。 ①上映会までの流れを知る。 ②何について調べるか決める。(グループで話し合い) ③調べ方を考える。(防災センターを提案する。)		
○/○	公共のマナーについて		
○/○	調べる内容を知る。 センター見学の役割分担を決める。 それぞれの役割に応じた練習をする。 (挨拶、質問、お礼)	展開	- 生活に結びついた教材を扱 う活動 - 自ら取り組める学習活動 - 精一杯力を出せる学習活動
○/○	見学当日の日程説明を知る。 (公共交通機関の支払い練習含む) センター見学の役割分担確認をする。		
○/○	防災センターでの質問をグループごとにまとめる。 グループ発表をする。 各災害の避難方法を自分達で実践する。 番組作成にあたって役割を決める。		
○/○	セリフ、衣装を決める。 各グループに分かれて番組に作りに向けて練習をする。	終末	- 成し遂げられる学習活動 - 達成感や成就感のもてる活 動
○/○	各グループに分かれて番組に作りに向けて練習をする。 ビデオ撮影をする。		
○/○	できあがった番組を視聴する。		
○/○	全校上映会に向けての準備の役割を決める。 全校の上映会に向けての準備をする。 ・チラシ、ポスター作り、チラシ配り ・全校放送の役決め、セリフ練習 ・当日の司会進行の役決め、セリフ練習	終了	- 集団で行った活動の成果 を共有する活動 - 次の単元への期待をふく らます活動
○/○	上映会に向けての準備をする。 会場設営(会議室)、予行練習をする。		
○/○	全校生徒に向けて上映会を開く。 校長先生より感謝状をもらう。		

指導計画参考：京都府立中丹支援学校（高等部）

作業学習

作業学習は、作業活動を学習活動の中心にしながら、子どもの働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に扱うものです。

作業学習の指導は、単に職業・家庭科の内容だけでなく、各教科等の広範囲の内容が扱われます。作業学習で取り扱われる作業活動の種類は、農耕、園芸、紙工、木工、縫製、織物、金工、窯業、セメント加工、印刷、調理、食品加工、クリーニング等の他、販売、清掃、接客等も含み、多種多様です。

指導に当たって考慮する点

- ①生徒にとって教育的価値の高い作業活動等を含み、それらの活動に取り組む喜びや完成の達成感が味わえること
- ②地域性に立脚した特色をもつとともに、原料・材料が入手しやすく、持続性のある作業種を選定すること
- ③生徒の実態に応じた段階的な指導ができるものであること
- ④知的障害の状態等が多様な生徒が、共同で取り組める作業活動を含んでいること
- ⑤作業内容や作業場所が安全で衛生的、健康的であり、作業量や作業の形態、実習期間などに適切な配慮がなされていること
- ⑥作業製品等の利用価値が高く、生産から消費への流れが理解されやすいものであること

引用：特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（高等部）

コラム⑥職業教育

職業教育とは、職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育のことです。

京都府教育振興プランにおいて、特別支援教育は、子ども一人一人の自立や社会参加を目指し、就学前から卒業後に至るまでの一貫した教育を推進することとし、職業教育に関しては、企業やNPO、教育訓練機関等と連携して、多様な職業教育の機会を拡充するなどの取組を推進としています。

特別支援学校では、企業における実習や作業学習等の体験を通じ働くことの意義や喜びを知り、自立への意欲や人と接する態度を育むよう取り組みを進めています。

府立支援学校高等部における今後の職業教育の在り方や充実策については、以下の4点で検討を進めています。

時代の変化に対応した新たな学科やコースの設置

各特別支援学校の特色を生かした職業教育の推進

外部人材を活用した就労支援策の実施

労働・福祉等関係機関との連携による新たな就労支援システムの構築



※障害者の産業別の就職状況は、医療・福祉分野が大幅に増加し、製造業分野が減少しているのが全国的な傾向です。産業構造が製造業からサービス業へ移行し、全国的に就労先の職種が変化してきています。今後、平成27年4月に障害者雇用納付金制度の対象の企業が拡大されるため、中小企業における障害者雇用が促進されると思われます。

京都府特別支援教育課 HP「府立特別支援学校高等部における職業教育充実検討のための有識者会議（意見のまとめ）」 <http://www.kyoto-be.ne.jp/tokubetsu/cms/>

各教科等を合わせた指導の課題

「各教科等を合わせた指導」では、自立と社会参加を目指す知的障害のある児童生徒のために、興味・関心をもって、達成感を感じることができる学習、主体的に生活を送ることができるようになるための学習等、児童生徒の実態に応じた内容が取り組まれてきました。

しかし、「各教科等を合わせた指導」を実施する上で、指導内容や目標を考える場合に、児童生徒の実態が多様であるため、どこに焦点を当てるのが難しいのが現状です。また、特別支援学校のほとんどがチームティーチングで取り組んでいますが、指導計画や指導方法をチームティーチングの教師間で共通理解することが難しい等とさまざまな課題があることがわかりました。

府立支援学校及び宇治市の小学校・中学校から集まった研究メンバー13名からの聞き取り調査からは以下のような具体的な課題が挙げられました。



- 教育課程上に「教科別の指導」が多いため、「各教科等を合わせた指導」がどのような授業なのかイメージをもちにくい。
- 各教科等を合わせた指導において、「教科別の指導」や「合科的な指導」として進めていることが多い。
- 学校独自の枠組みでの授業が多い。
- 子どもにつけたい力が教師間で曖昧になり、そのことに伴って、「各教科等を合わせた指導」の授業も曖昧になりがちである。
- 「教科別の指導」や「自立活動」等の関連が難しい。
- 小学部、中学部、高等部との学部間のつながりのある指導計画を立てることが難しい。
- 教師間の「各教科等を合わせた指導」のとらえ方がさまざまで共通理解が難しい。等



これらの課題の解決を目指し、研究プロジェクトでは、

① 「各教科等を合わせた指導」のベクトル(目標を達成させるための方向性)の共通化

② 「各教科等を合わせた指導」の授業モデルの検討及び府内への提案

の2点のポイントで研究を進めました。

①については、前項で示した「各教科等を合わせた指導」に関わる概要として研究の成果をまとめました。

また、各校においても

- ・学級担任で「各教科等を合わせた指導」についての協議及び授業改善
- ・「各教科等を合わせた指導」についての研修会
- ・「各教科等を合わせた指導」について、他校の教育課程を参考に、自校の教育課程上の比較検討
- ・自校の特色を活かした教育課程の見直し
- ・指導計画の見直しと改善

等、「各教科等を合わせた指導」の研修及び研究を進めました。

②については、各校が取り組んだ授業をサンプルとして、各授業形態の考慮する点を参考に協議を進め、府内に「各教科等を合わせた指導」のスタンダード授業を広めるためのモデルの検討を行いました。

① 「各教科等を合わせた指導」(生活単元学習、遊びの指導)のスタンダード版授業の共有及び共通化

② 「各教科等を合わせた指導」の授業モデルとして府内に発信

の2点を目的としました。

Check point

授業検討を進めよう！！

今回、授業モデルを検討する上で、「考慮する点」を参考に3つのステップで授業検討を進めました。

①授業発信

- ・府内11校及び小中学校各1校の「生活単元学習」と「遊びの指導」の授業の共有

②検討

- ・「考慮する点」を踏まえた論議

③授業の特徴

- ・レーダーチャートを活用して、授業の特徴を把握

授業モデル検討のステップ

ステップ① 授業発信

研究協力員が実際に取り組んだ又は学校で取り組んでいる「生活単元学習」及び「遊びの指導」の授業をサンプルとして持ち寄りました。

子どもの実態、子どもにねがう姿、単元の目標、本時の目標、授業の流れ等、ビデオを交えて共有することで、各校で行われている「各教科等を合わせた指導」の具体的な授業像を共通確認できました。



ステップ② 検討

検討する上の観点として「考慮する点」を活用しました。授業の特徴、授業改善のアイデア等、考慮する点に焦点を絞った発言を心がけることで、授業の見方の視点が定まり、「各教科等を合わせた指導」の授業像やイメージをより共有することができました。

ステップ③ 授業の特徴

レーダーチャートを用いて授業の特徴を明確にしました。授業のアピールできる項目から点数化し、その点を基準にその他の項目について点数化しました。あくまでも授業の特徴を表すレーダーチャートとすることをねらいに、授業者の自己評価を中心に、点数化を進めました。

この授業モデル検討を通して、「各教科等を合わせた指導」の授業像の共有を進めるとともに、「考慮する点」を活用したことで「各教科等を合わせた指導」の授業の見方が共通化しました。

この授業検討の方法を皆さんの学校でも活用してみませんか。

point of view 授業モデル

この授業モデルは、各教科等を合わせた指導（遊びの指導、生活単元学習）とはどのような授業なのかを紹介する授業モデルです。

子どもたちの意欲を引き出す授業名（単元・題材名）を参考にしましょう。

指導の形態を確認しましょう。

授業名
なつまつり

児童生徒の様子（小・中段階）

いろいろなことに興味・関心があり、遊びや学習などに意欲的に取り組むことができ、簡単なルールのある遊びを友だちと一緒に楽しむことができる子どもたちである。
まひのため発音が不明瞭だったり、改まった場では自信がなく声が小さくなったりすることもあるが、どの子も言葉でのコミュニケーションをとることができる小学部高学年の児童6名の学級である。

児童生徒にねがう姿

・自分の意見（やりたい遊びや活動）をみんなの中で積極的に発表してほしい。
・友だちと協力しながら、見通しをもって意欲的に取り組んでほしい。
・他の学級のみんなを誘って一緒に遊ぶことで、小学部のリーダーとしての力をつけてほしい。

単元の目標

・コーナー遊びの準備や説明をすることで、他の学級の友だちを意識して一緒に楽しく活動することができる。

本時の目標

・学級を越えた集団の中で、友だちとのかかわりや遊びの活動を楽しむことができる。
・自分が担当するコーナー遊びの準備や説明をすることができる。

授業の流れ

①会場の準備

（遊びコーナーの設置……一人一店主）
・ボール投げ ・輪投げ
・的あて ・魚釣り
・ジャンケン ・ミニカップゼリー

②なつまつりの開催

・他の学級よりお客さんが来る
・コーナー遊びへの呼び込み
・遊び方の説明と準備、農品渡し

③まとめ

・他のコーナーで遊ぶ
・楽しかったことの発表

大まかな授業の流れを参考にしましょう。

授業の雰囲気や教材教具の工夫を参考にしましょう。

子どもにねがう姿（つけない力）を参考にしましょう。

目標設定の具体例を参考にしましょう。

考慮する点を踏まえた授業モデルの検討内容を参考にしましょう。

指導 考慮する点

・取り組み、身体活動を活発にし、仲間とのかかわりを促していくもの
設定
・広い場所を活用して子どもたちが企画したコーナー遊びを設定した。
・子どもたちが普段している遊びを通して、他の学級の子どもたちと一緒に遊ぶ活動をした。
関わりを
・遊びコーナーをお店に見立ててチケットの受け渡しを通して、子ども同士のやりとりを増やした。
・子どもたちの手作りのおもちゃで子どもたち同士が遊ぶようにした。
する遊び
・室内での遊びであり、子どもたちの手作りおもちゃを通して遊ぶ場面を設定したこともあり、ダイナミックな身体活動を設定するのは難しかった。
すること
・多くの子どもたちが出入りするため、遊びのスペース等を十分に確保した。

授業の特徴を知り、子どもの実態に応じた特色ある授業例を参考にしましょう。

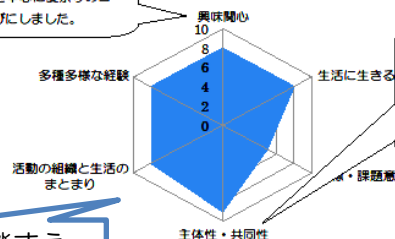
安全面 衛生面	なく、児童の健康面や衛生面に配慮しつつ、安全に遊べる場所を設定	学校での遊びの作成したおもちゃだ。 ・他の学級の子ど ・子どもたちが多 ・日常的に行って めとして、1年 で取り組ん たり、小 とが
⑤色んな遊びの	自ら遊びに取り組むことが難しい児童には、遊びを促したり、遊びに誘ったりして、色々な遊びが経験できるように配慮して、遊びの楽しさを味わえるようにする。	
	日常生活の指導（休み時間）の遊びの充実と発展を考えた設定	

<特徴>

普段休み時間等で遊んでいる遊びを、小学部全体で遊べるコーナー遊びとして発展させた遊びの指導です。子どもたちが主体的に関わっている活動が特徴です。

遊びの指導

子どもたちの興味関心のある遊びを中心に夏祭りのコーナー遊びにしました。



子ども同士のやりとりを増やすこと、役割を明確にすることで、主体的な活動につながりました。

※教育課程上の位置づけが、教科・領域のみの設定の場合は、研究的に「生活単元学習」及び「遊びの指導」に再構成を行い、研究を進めました。（基の授業名は矢印で示しています。）

考慮する点を踏まえた授業の特徴を知りましょう。

授業モデル

各教科等を合わせた指導

遊びの指導



授業名

なつまつり

児童生徒の様子（小 C段階）

- いろいろなことに興味・関心があり、遊びや学習などに意欲的に取り組むことができ、簡単なルールのある遊びを友だちと一緒に楽しむことができる子どもたちである。
- まひのため発音が不明瞭だったり、改まった場では自信がなく声が小さくなったりすることもあるが、どの子も言葉でのコミュニケーションをとることができる小学部高学年の児童6名の学級である。

児童生徒にねがう姿

- 自分の意見（やりたい遊びや活動）をみんなの中で積極的に発表してほしい。
- 友だちと協力しながら、見通しをもって意欲的に取り組んでほしい。
- 他の学級のみんなを誘って一緒に遊ぶことで、小学部のリーダーとしての力をつけてほしい。

単元の目標

- コーナー遊びの準備や説明をすることで、他の学級の友だちを意識して一緒に楽しく活動することができる。

本時の目標

- 学級を越えた集団の中で、友だちとのかかわりや遊びの活動を楽しむことができる。
- 自分が担当するコーナー遊びの準備や説明をすることができる。

授業の流れ

① 会場の準備

（遊びコーナーの設営……一人一店主）

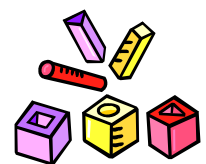
- ボール投げ • 輪投げ
- 的あて • 魚釣り
- ジャンケン

② なつまつりの開催

- 他の学級よりお客さんが来る
- コーナー遊びへの呼び込み
- 遊び方の説明と準備、景品渡し

③ まとめ

- 他のコーナーで遊ぶ
- 楽しかったことの発表





遊びの指導 考慮する点



遊びを学習活動の中心に据えて取り組み、身体活動を活発にし、仲間とのかかわりを促し、意欲的な活動をはぐくみ、心身の発達を促していくもの

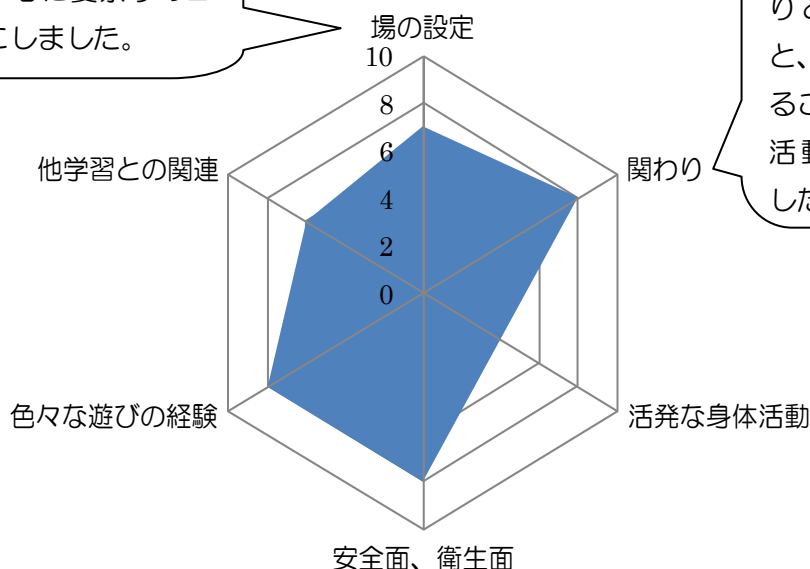
① 場の設定	児童が遊ぼうとする場の設定	・広い場所を活用して子どもたちが企画したコーナー遊びを設定した。 ・子どもたちが普段している遊びを通して、他の学級の子どもたちと一緒に遊ぶ活動をした。
② 関わり	教師と児童、児童同士の関わりを促すことができるよう、場の設定、教師の対応、道具等の工夫	・遊びコーナーをお店に見立ててチケットの受け渡しを通して、子ども同士のやりとりを増やした。 ・子どもたちの手作りのおもちゃで子どもたち同士が遊ぶようにした。
③ 活発な身体活動	身体活動が活発に展開できる遊びを多く取り入れる。	・室内での遊びであり、子どもたちの手作りおもちゃを通して遊ぶ場面を設定したこともあり、ダイナミックな身体活動を設定するのは難しかった。
④ 安全面、衛生面	遊びをできるかぎり制限することなく、児童の健康面や衛生面に配慮しつつ、安全に遊べる場所を設定	・多くの子どもたちが出入りするため、遊びのスペース等を十分に確保した。
⑤ 色々な遊びの経験	自ら遊びに取り組むことが難しい児童には、遊びを促したり、遊びに誘ったりして、色々な遊びが経験できるように配慮して、遊びの楽しさを味わえるようにする。	・学級での遊びの指導の時間や図画工作の時間に作成したおもちゃを活用して遊べる工夫をした。 ・他の学級の子どもたちにコーナー遊びを紹介したり、チケットの受け渡しをしたりする役割を果たすことができた。
⑥ その他	日常生活の指導（休み時間）の遊びの充実と発展を考えた設定	・日常的に行っている学級での遊びの指導のまとめとして、1学期末に小学部全体での遊びとして取り組んだ。小学部のリーダーとして活動し、小学部全体の集団作りを進めることができた。

<特徴>

普段休み時間等で遊んでいる遊びを、小学部全体で遊べるコーナー遊びとして発展させた遊びの指導です。子どもたちが主体的に関わっていける活動が特徴です。

子どもたちの興味・関心のある遊びを中心に夏祭りのコーナー遊びにしました。

遊びの指導



子ども同士のやりとりを増やすこと、役割を明確にすることで、主体的な活動につながりました。



各教科等を合わせた指導

遊びの指導



授業名

ゆうびんやさんのホネホネさん

児童生徒の様子（小 AB段階）

- ・1年生（3名）、2年生（2名）の内2名が肢体不自由の学級である。
- ・日常の慣れた場面では大人の言葉かけや指示を理解できる。写真や絵カード、あるいは文字の助けも得て、大まかな見通しをもつことができる。
- ・発語は、音声模倣がようやくでき始めた子から2・3語文で要求を伝えることができる子までいる。「誰と行ったの。」「どこに行ったの。」などの質問に答えたり、楽しかったことを伝えたりすることができ始めている。

児童生徒にねがう姿

- ・読み聞かせは、これまでに、紙芝居、絵本で行ってきた。お話の理解や楽しみ方、イメージをもてる力もそれぞれ異なるが、お話を楽しめること、イメージをもつ力を育てたい。
- ・子どもたちにとって新しいお話を題材にしながら、再現遊びを行う中で、メッセージとしての文字や図・写真へ関心をもたせたり、メッセージを受け取って活動したりする遊びを楽しめるようにしたい。

単元の目標

- ・「みんなで見る」雰囲気の中で、お話を見聴きして楽しむ。
- ・「お手紙」というもの（自分宛の文字や絵が描かれたもの）に対して関心をもつ。
- ・メッセージを受け取り、理解して、ものを見つけ出し持ってくる。
- ・活動内容を理解したことをベースに、お手紙に書かれている内容が変わっても、書かれているものを見つけることができる。

本時の目標

- ・活動に興味・関心をもち、注目することができる。
- ・テーマソングや登場人物の名前などを覚え、親しみをもって受け入れることができる。
- ・授業展開のパターンを覚え、見通しをもって活動に参加することができる。
- ・活動内容がわかり、お手紙の内容を自分で見て、書かれている物を見つけることができる。

授業の流れ

- ① はじめのあいさつをする。
- ② テーマソングを歌う。
- ③ 『ゆうびんやさんのホネホネさん』のペープサートを見る。
- ④ 活動する。
 - ・ホネホネさん登場（教室のドアから入ってくる）
 - ・教師が手紙をもらい活動するのを見る。
 - ・ホネホネさんから手紙をもらい、メッセージを見て書かれている物を見つけ出す。
- ⑤ みんなが持ち寄った楽器で、ホネホネさんも一緒に『おもちゃのチャチャチャ』を歌う。
- ⑥ ホネホネさんに各自あいさつをする。
- ⑦ おわりのあいさつ





遊びの指導 考慮する点



遊びを学習活動の中心に据えて取り組み、身体活動を活発にし、仲間とのかかわりを促し、意欲的な活動をはぐくみ、心身の発達を促していくもの		
① 場の設定	児童が遊ぼうとする場の設定	磨りガラス越しの教材提示や教師の変装、音等の教材の工夫から子どもが遊ぼうとする気持ちを引き出した。
② 関わり	教師と児童、児童同士の関わりを促すことができるよう、場の設定、教師の対応、道具等の工夫	子どもの実態から子ども同士の関わりより、教師との関わりを多く設定したが、教師と子どもの関わりを他の子どもが見て楽しむ場面が見られ、子ども同士への関心が高まった。
③ 活発な身体活動	身体活動が活発に展開できる遊びを多く取り入れる。	活発な身体活動の内容が少なかったため、身体活動を取り入れても良かった。
④ 安全面、衛生面	遊びをできるかぎり制限することなく、児童の健康面や衛生面に配慮しつつ、安全に遊べる場所を設定	子どもが手に取りやすい教材教具を活用し、遊びの制限をなくした。子どもが思わず手を伸ばしたくなるような教材工夫（マジックテープの音の工夫、1人1人への手紙等）をしたことや、発展性のある授業の流れにしたため、さまざまな内容を設定することができた。
⑤ 色々な遊びの経験	自ら遊びに取り組むことが難しい児童には、遊びを促したり、遊びに誘ったりして、色々な遊びが経験できるように配慮して、遊びの楽しさを味わえるようにする。	子どもが思わず手を伸ばしたくなるような教材工夫（マジックテープの音の工夫、1人1人への手紙等）をしたことや、発展性のある授業の流れにしたため、さまざまな内容を設定することができた。
⑥ その他	課題学習	子どもたちの発達と障害の実態に基づいた課題にアプローチする。自我の育ちと文字や写真への興味を基盤にすることで、意欲的に目的に向かい自分の力で移動する姿が見られた。

<特徴>

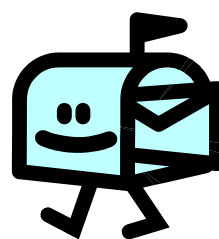
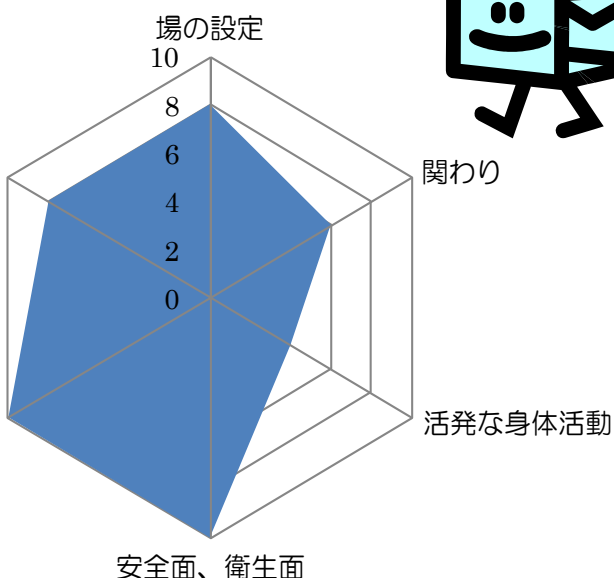
絵本のお話を題材にした遊びの指導です。子どもの興味を引く教材教具や場の設定の工夫から、子どもの遊ぼうとする気持ちを引き出しました。

子どもたちの実態に合わせて、子どもたちが遊びたいと思う意欲に働きかける「遊びの仕掛け」をちりばめました。

教材の提示の方法、変化のタイミング等子どもたちの実態に合わせて考えることで、遊び方が発展しました。

色々な遊びの経験

遊びの指導



遊びの指導

授業名

新聞紙で遊ぼう



児童生徒の様子（小 AB段階）

- 何事に対しても意欲があり、積極的に取り組む。
- 人への関心が高く、指導者や友だちと一緒に遊べる。
- 徐々に指導者を介して児童同士の関わりが見られるようになってきた。

児童生徒にねがう姿

- 紙遊びを通して、身体を動かしたり、感覚を刺激したりしてボディイメージを膨らませたい。
- 友だちと協力して取り組んだり、見通しをもって意欲的に取り組んだりしてほしい。
- 児童が興味をもちにくい活動も、さまざまな活動を設定することで興味を広げてほしい。

単元の目標

- 紙の活動やさまざまな感覚の活動を通して、好きな活動を見つけることができる。
- 友だちを意識して、声をかけたり、一緒に活動したり、協力して活動したりすることができる。

本時の目標

- 友だちと一緒に新聞破りをしたり、新聞遊びをしたりすることができる。
- 好きな活動があることに見通しをもって取り組むことができる。
- 友だちと一緒にゴミ捨て場までごみを運ぶことができる。

授業の流れ

- ① ダンス
- ② あいさつ
- ③ 活動内容の確認
- ④ 新聞紙を破る
- ⑤ 紙吹雪を作る
- ⑥ 新聞紙バルーン
- ⑦ 待つ（エアトランポリンの準備）
- ⑧ エアトランポリン
- ⑨ エアトランポリンの片付け
- ⑩ 紙を集める
- ⑪ 紙を捨てる
- ⑫ ゴミ捨て場に持っていく
- ⑬ 画像での振り返り
- ⑭ あいさつ





遊びの指導 考慮する点



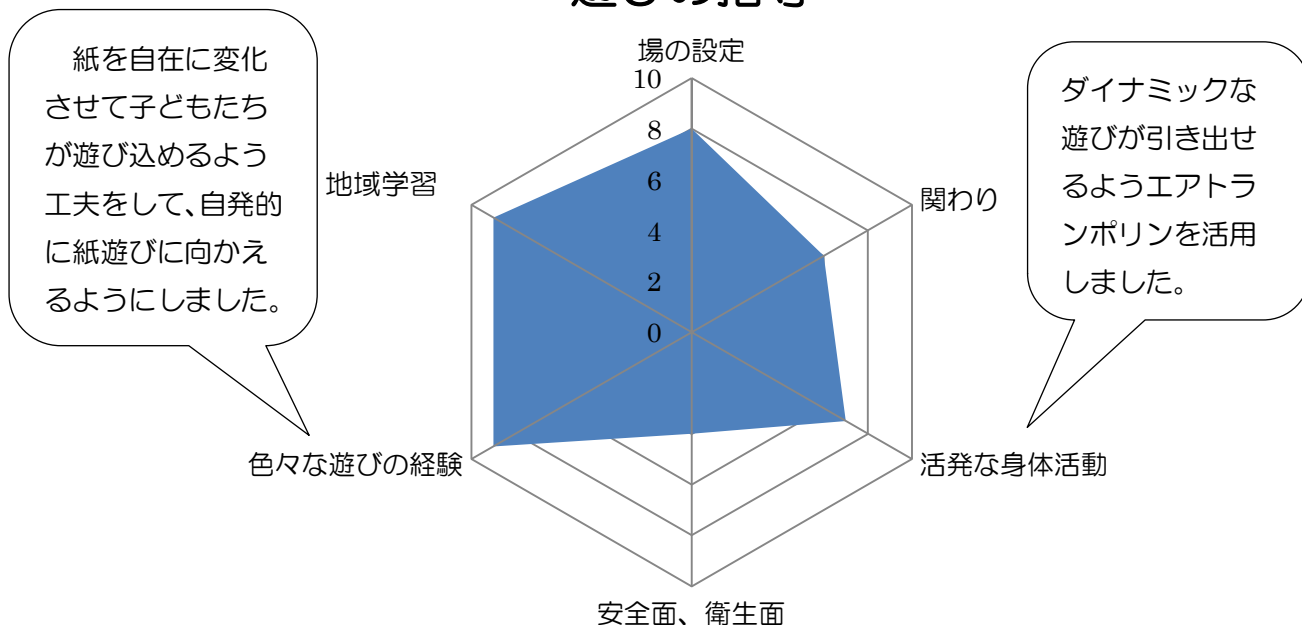
遊びを学習活動の中心に据えて取り組み、身体活動を活発にし、仲間とのかかわりを促し、意欲的な活動をはぐくみ、心身の発達を促していくもの

① 場の設定	児童が遊びようとする場の設定	・オープンスペースを使うことで、教室をどのようにでも構造化できる。 ・自発的に紙遊びに向かえるよう配置の工夫をした。
② 関わり	教師と児童、児童同士の関わりを促すことができるよう、場の設定、教師の対応、道具等の工夫	・教師が楽しく遊ぶことで、子どもが「自分もやってみよう」とする意欲を引き出すことができた。 ・友だちとの関わりを増やす工夫を入れ、友だちとの関わりをつくる。
③ 活発な身体活動	身体活動が活発に展開できる遊びを多く取り入れる。	・紙で作ったおもちゃがぶら下がっている遊びは、エアトランポリンの上を跳んでみようとする意欲とジャンプをしたら取れるというめあてがもて、ダイナミックな動きにつながる設定である。 ・エアトランポリンの活用で活発な身体活動が引き出せる。
④ 安全面、衛生面	遊びをできるかぎり制限することなく、児童の健康面や衛生面に配慮しつつ、安全に遊べる場所を設定	・紙は滑るので裸足で遊ぶようにする。
⑤ 色々な遊びの経験	自ら遊びに取り組むことが難しい児童には、遊びを促したり、遊びに誘ったりして、色々な遊びが経験できるように配慮して、遊びの楽しさを味わえるようにする。	・紙はどのような形態にも変化をするため、変化自体を楽しめ、さまざまな経験ができる。 ・紙を破る際に、長く、短く、小さく、大きく等の変化を楽しめるような促しをすると遊びの幅が広がる。
⑥ その他	地域学習	・常に地域との関わりを意識した指導を進める。(指導案に地域学習の観点を記載)

<特徴>

新聞紙を使ってダイナミックな遊びを指導しました。子どもたちの主体的な遊びを引き出すために授業展開を工夫しました。

遊びの指導



各教科等を合わせた指導

遊びの指導

授業名

おみこし ワッショイ！



児童生徒の様子（小・中・高 A段階）

- ・全員医療的ケアの必要な児童生徒で2名が人工呼吸器を使用している。
- ・視覚障害の程度や運動機能の実態が一人一人違うので、それぞれに応じた支援の工夫が必要である。

児童生徒にねがう姿

- ・「祭り」の賑やかな声、音、光などの日本の文化を体験し、楽しさを味わう。
- ・「わっしょい、わっしょい」の曲に合わせて、鈴付きのひもを振り動かしたり、楽器を鳴らしたりして「祭り」の雰囲気を楽しむ。

単元の目標

- ・提示物に興味をもち、見続けたり、追視したり、触れたりすることができる。
- ・教師の声や音に耳を傾け、受け止めを表現する。
- ・音楽を楽しみ、リラックスして教師と一緒に楽器を鳴らす。
- ・スイッチの感触に気づき、自ら手指を動かす。
- ・スイッチを操作することで起きる変化に気づき、自ら操作しようとする。

本時の目標

- ・スイッチを操作することで感触や起こる変化に気づき、自ら働きかけたり、操作しようとしたりすることで、楽器遊びをすることができる。
- ・「わっしょい、わっしょい」のかけ声等の賑やかな雰囲気を受け止め、表情や腕を動かしたりする等、身体全体で感情を表現する。
- ・語りかけや音に気持ちを向け、受け止めを表現する。

授業の流れ

- ① はじまりの会「ひとりじゃないさ」
- ② 季節を感じる（秋の花、虫の鳴き声等）
- ③ おみこしの提灯作りを思い出す
 - ・スイッチで映像スタート
 - ・スイッチ操作でおみこし登場
- ④ お祭り準備に向けて
 - ・「わっしょい、わっしょい」の歌
 - ・ロープを持って楽器鳴らし
 - ・テンポの違う掛け合い遊び
- ⑤ おわりの会





遊びの指導 考慮する点

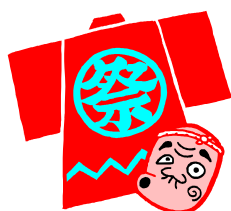


遊びを学習活動の中心に据えて取り組み、身体活動を活発にし、仲間とのかかわりを促し、意欲的な活動をはぐくみ、心身の発達を促していくもの

① 場の設定	児童生徒が遊ぼうとする場の設定	・ICT を有効に活用したことで、1人1人の子どもの意志や意欲を表出できるように工夫した。
② 関わり	教師と児童生徒、児童生徒同士の関わりを促すことができるよう、場の設定、教師の対応、道具等の工夫	・子どもの意志や意欲を教師が意味づけをすることで教師との関わりを深められるようにした。 ・教師との一対一の関わりだけでなく、集団として授業が楽しめるような教材の工夫をした。
③ 活発な身体活動	身体活動が活発に展開できる遊びを多く取り入れる。	・ダイナミックなスクリーンや教材教具を活用することで、五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）を使って全身で感じたり、変化を楽しんだりして遊べる工夫をした。
④ 安全面、衛生面	遊びをできるかぎり制限することなく、児童生徒の健康面や衛生面に配慮しつつ、安全に遊べる場所を設定	・関わる教師が常に子どもの様子を見ながら授業を進めることで健康管理に努めた。
⑤ 色々な遊びの経験	自ら遊びに取り組むことが難しい児童生徒には、遊びを促したり、遊びに誘ったりして、色々な遊びが経験できるように配慮して、遊びの楽しさを味わえるようにする。	・季節を感じるができる教材を準備するとともに、子ども自ら操作して、場面が変わったり、変化が起きるような工夫をしたりして、遊びのバリエーションを増やした。
⑥ その他	情報機器の活用 ICT を有効に活用した授業	・iPad 等を活用した教材開発を進めた。

<特徴>

重度重複障害の子どもたちの「五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）で感じる」、「五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）で遊ぶ」、「文化の体験」を意識した遊びの指導です。子どもたちの主体的な表出を受け取る情報機器の活用が特徴です。

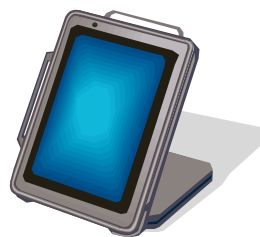
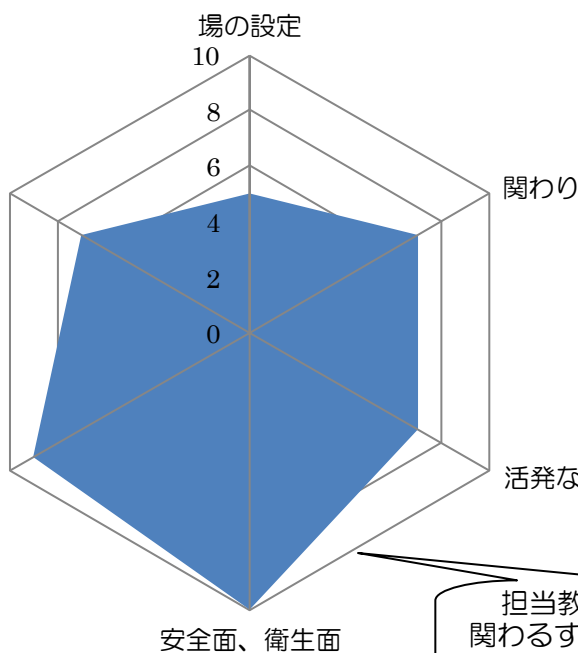


情報機器の活用

子どもたちの様子を丁寧にしながら、環境の変化を工夫して子どもたちを心地よい遊びの世界へ引き込みました。

色々な遊びの経験

遊びの指導



関わり

活発な身体活動

安全面、衛生面

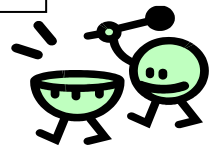
担当教員だけではなく、授業に関わるすべての教職員で安全・衛生管理を徹底しました。

各教科等を合わせた指導

生活単元学習

授業名

学園文化祭（太鼓）発表に向けて



児童生徒の様子（中 CD段階）

- 学級では伸び伸び過ごしているが、大きな集団では自分を出せないことが多い。
- 明るく前向きな気持ちがあり、自信があることには意欲的に取り組む。

児童生徒にねがう姿

- 目標に向かってコツコツ努力して「できた」という達成感を味わってほしい。
- 自信をもって、さまざまな活動に取り組んでほしい。
- 周囲の友だちから認められることで、堂々とありのままの自分を出せるようになってほしい。

単元の目標

- 練習に真剣に取り組み、堂々と発表することで達成感と自信の気持ちを培う。
- 学級全員でリズムを合わせて演奏することを意識し、自分の役割を果たす。

本時の目標

- 速さやリズムを意識して、みんなと合わせて各パートの演奏ができる。
- 学級紹介を、良い姿勢で堂々と発表できる。

授業の流れ

- ① 前回までの活動の振り返り
- ② 今日の練習内容の確認
- ③ パート練習（リズムよく聞かせて打つ練習）
- ④ ポイント練習（かけ声や手を挙げるポーズ等、動きを合わせるように意識する。）
- ⑤ 紹介文の練習
 - 話す時の姿勢
- ⑥ 通し練習
 - リズムの間合い
 - 動きを合わせる
- ⑦ まとめ





生活単元学習 考慮する点



児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際の・総合的に学習するもの

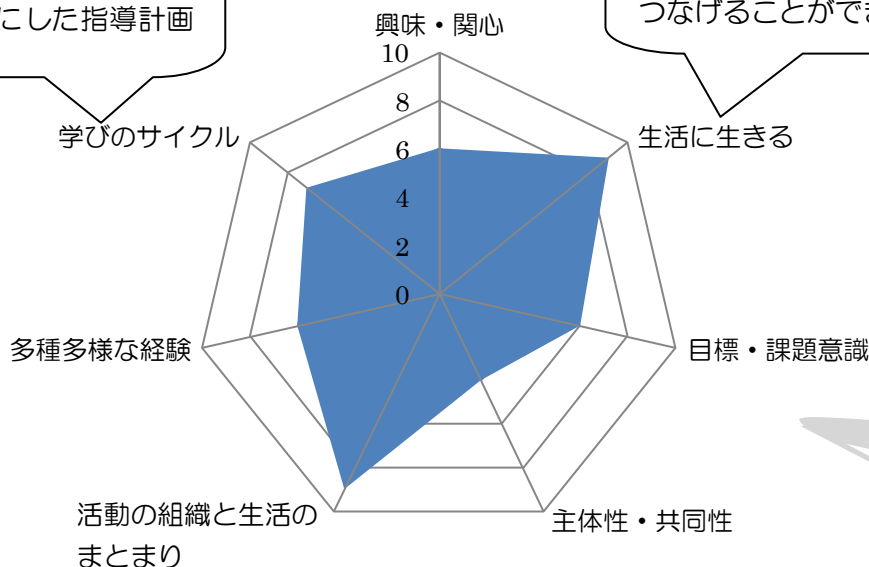
① 興味・関心	実際の生活から発展し、児童生徒の知的障害の状態等や興味・関心などに応じたものであり、個人差の大きい集団にも適合するもの	・身体全体を使って大きく叩く等の粗大運動や、音を合わせて叩くことなど、太鼓発表は、生徒の好む音楽的な活動である。
② 生活に生きる	必要な知識・技能の獲得とともに、生活上の望ましい習慣・態度の形成を図るものであり、身に付けた内容が生活に生かされるもの	・練習の成果を発揮する場があることで、緊張感を持って、努力できる。その経験や、周囲から認められる実感が、学校生活の安定や自己肯定感を育てることにつながる。
③ 目標・課題意識	児童生徒が目標をもち、見通しをもって、単元の活動に積極的に取り組むものであり、目標意識や課題意識を育てる活動を含んだもの	・パートによって、ひとりで叩く、友だちと息を合わせる等、それぞれの練習目標が立てやすい。文化祭当日の個々の役割も、学年に応じて設定でき、責任を持って取り組める。
④ 主体性・共同性	一人一人の児童生徒が力を発揮し、主体的に取り組むとともに、集団全体で単元の活動に共同して取り組めるもの	・全員の合同発表だけでなく、紹介文を読む、演奏をリードするソロパートを担当するなど、個々の役割と全体のまとまりを考えた構成にする。
⑤ 活動の組織と生活のまとまり	各単元における児童生徒の目標あるいは課題の成就に必要なかつ十分な活動で組織され、その一連の単元の活動は、児童生徒の自然な生活としてのまとまりのあるもの	・少し難易度のある曲を選定したり、文化祭発表を目標設定することで、生徒自身が、練習に打ち込んだり、目的意識をもって取り組める。
⑥ 多種多様な経験	豊かな内容を含む活動で組織され、児童生徒がいろいろな単元を通して、多種多様な経験ができるように計画されていること	・太鼓の演奏の他にも、素早く着替える、舞台裏の動き、準備（太鼓運び）など、舞台の裏方の経験ができる。
⑦ その他	学びのサイクルを大切にしたい計画を意識した単元	・こつこつと練習（努力）する、覚える、できる、褒められる、周囲に認められる、達成感をもつ、という学びのサイクルにつながる。

<特徴>

行事に向けた取組で構成した生活単元学習です。文化祭を目標に努力をして練習し、周囲から認められ、達成感を味わうことで望ましい態度の形成を図った取組です。

文化祭までの見通しをもたせた上で、わかりやすく目的意識と意欲をもって学べるサイクルを大切にしたい指導計画としました。

生活単元学習



頑張ったことが認められることで、自己肯定感が向上し、生活に生きる望ましい態度の形成につながることができました。



各教科等を合わせた指導

生活単元学習



授業名

郵便屋さんになろう！！

児童生徒の様子（小 AB段階）

- ・肢体不自由障害児を含む低学年学級である。
- ・パネルシアターや音楽が好きで、歌と一緒に歌ったりリズムに合わせて身体を動かしたりして、表現することができる。
- ・コミュニケーション手段として、言語で伝えたり、サインや身体表現で伝えたりすることができる。

児童生徒にねがう姿

- ・人と関わりを深めてほしい。
- ・体験的な活動を通して「ありがとう」「どうぞ」を言葉や身体表現で自分から伝えることができたり、言われたりする経験を積みあげ、日常生活の中で自然に使えるようにしたい。
- ・郵便屋さんのお手伝いを通して、人の役に立った喜びやその達成感から自己肯定感を高め、自信につなげたい。

単元の目標

- ・郵便屋さんになって、手紙を手渡し、郵便屋さんのお手伝いをする。
- ・「どうぞ」や「ありがとう」を、言葉や身体表現で言ったり言われたりする経験を積む。

本時の目標

- ・病気になった郵便屋さんの代わりに手紙を手渡すことができる。
- ・「どうぞ」「ありがとう」を言葉やサイン、身振りで伝えることができる。

授業の流れ

- ① あいさつ
- ② パネルシアター「森の郵便屋さん」
- ③ ビデオ「郵便屋さんのお仕事って？」
- ④ 病気になった郵便屋さんのお手伝いをしよう
 - ・郵便屋さんから郵便力バンを受け取る
 - ・ペアの友だちとハガキを届けに行く
 - ・郵便屋さんからお礼のプレゼント（バッチ）をもらう
 - ・もらったバッチを「頑張り表」に貼る
- ⑤ あいさつ





生活単元学習 考慮する点



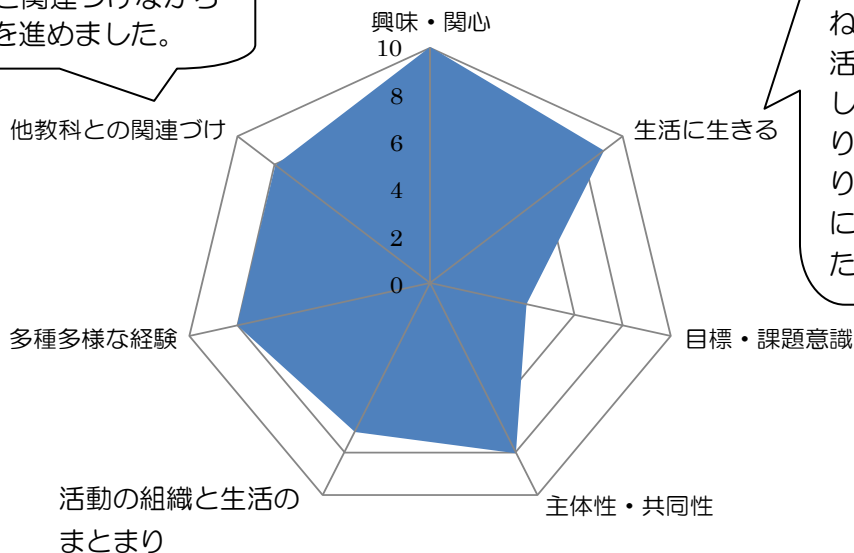
児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際の・総合的に学習するもの		
① 興味・関心	実際の生活から発展し、児童生徒の知的障害の状態等や興味・関心などに応じたものであり、個人差の大きい集団にも適合するもの	・それぞれの児童の好きな要素を取り入れることで（郵便配達の様子をDVDやパネルシアターで繰り返し見たり、オリジナルの歌を作成したりすることで）児童の興味・関心につながった。
② 生活に生きる	必要な知識・技能の獲得とともに、生活上の望ましい習慣・態度の形成を図るものであり、身に付けた内容が生活に生かされるもの	・手紙を届ける時に「どうぞ」と言葉やサインで伝えることで、授業外でも友だちに体温計を自分から渡すなどの行動が増えた。また、家庭でも「どうぞ」と新聞紙などを渡す手伝いにもつながった。
③ 目標・課題意識	児童生徒が目標をもち、見通しをもって、単元の活動に積極的に取り組むものであり、目標意識や課題意識を育てる活動を含んだもの	・郵便のシステムを理解することは難しいが、手紙を届ける活動を郵便屋さんのお手伝いとして位置付けて取り組むことで活動に目標意識を持ち、見通しをもって活動できた。
④ 主体性・共同性	一人一人の児童生徒が力を発揮し、主体的に取り組むとともに、集団全体で単元の活動に共同して取り組めるもの	・憧れの存在（オリジナルキャラクター）やオリジナルの歌を導入することで、活動に見通しをもち、子どもたち自身が主体的に取り組むことができた。
⑤ 活動の組織と生活のまとめ	各単元における児童生徒の目標あるいは課題の成就に必要なかつ十分な活動で組織され、その一連の単元の活動は、児童生徒の自然な生活としてのまとめのあるもの	・学級内で繰り返し取り組むことで、他学級との関わりもスムーズにでき、学校内の多くの先生から頼まれた手紙を郵便屋さんになって他学級へ配達をすることができた。また、手紙を渡す際に、相手のペースに合わせるなど子どもたち自身が考えて活動に取り組めた。
⑥ 多種多様な経験	豊かな内容を含む活動で組織され、児童生徒がいろいろな単元を通して、多種多様な経験ができるように計画されていること	・実際に郵便局で切手を買って保護者に手紙を送ったり、交流をしている小学校へ手紙を届けに行ったりするなどの活動に広げることができた。
⑦ その他	他教科との密接に関連づけが明確であること	・音楽、国語、図画工作、特別活動と関連づけをしながら学習を進めることができた。

<特徴>

人との関わりを深めていけることをねらいにおいた生活単元学習です。郵便屋さんの体験活動を通して「どうぞ」「ありがとう」を伝える経験を積み上げました。

教科学習で身に付ける力を明確にし、それと関連づけながら総合的に学習を進めました。

生活単元学習



経験の積み重ねにより、日常生活でも相手に対して「どうぞ」「ありがとう」の関わりがもてるようになってきました。



各教科等を合わせた指導

生活単元学習



授業名

クリスマスツリーを作って、販売しよう

児童生徒の様子（中 BC段階）

- ・中高等部の複数学年による集団である。
- ・他者との共感により活動に楽しみをもてる生徒や手指の巧緻性や道具の操作性も比較的高い生徒がいる。
- ・全身を使って活動することが乏しくなりがちで、身体の協調性も未熟な面がある。

児童生徒にねがう姿

- ・道具の使い方や用途を知り、生活を豊かにすることができる。
- ・道具を使って、様々な身体の動きを学ぶことができる。
- ・目標を自分で決定し、行動することができる。
- ・仲間との役割分担を通して、協力して取り組むことができる。

単元の目標

- ・作品を作る工程で必要な道具を知り、それぞれの作業工程で安全に道具を使用する。
- ・完成した作品をイメージし、必要な部品や作業の見通しをもち、「次に何をするか」を自分で決めて行動する。
- ・販売学習を通して、友だちと役割分担をしたり、お金の役割について話し合いをしたりする。

本時の目標

- ・作業工程の見通しをもち、次の作業を決め、安全に行動する。
- ・授業の終わりに、今日行った活動と明日行う活動を発表する。

授業の流れ

- ① はじまりのあいさつ
- ② 内容の説明を聞く
- ③ 自分の活動を発表する
- ④ 個々に活動に取り組む
 - ・木を切る（のこぎり）
 - ・辺を削る（紙やすり）
 - ・色を塗る（スプレー缶）
 - ・彫る（彫刻刀）
 - ・組み立てる
- ⑤ 本時の活動したことを発表する
- ⑥ おわりのあいさつ





生活単元学習 考慮する点



児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際の・総合的に学習するもの

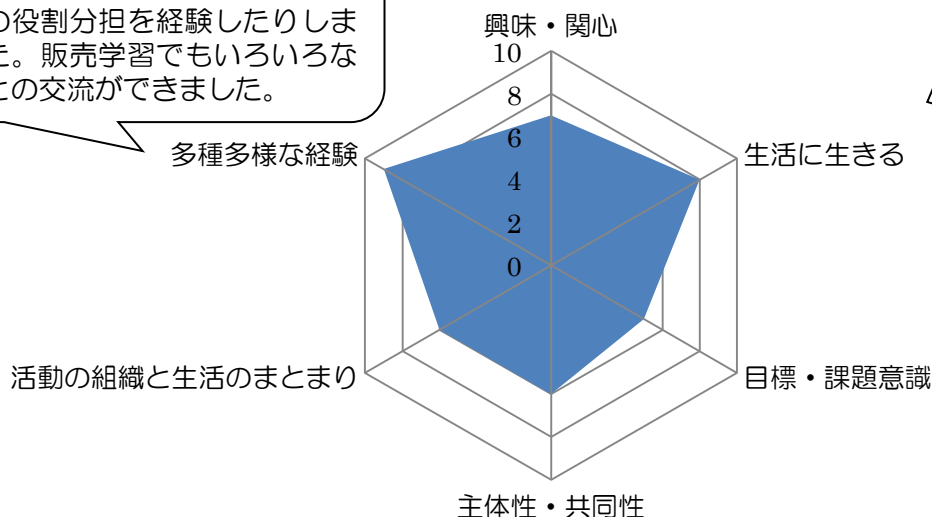
①興味・関心	実際の生活から発展し、児童生徒の知的障害の状態等や興味・関心などに応じたものであり、個人差の大きい集団にも適合するもの	・道具の操作による感覚的な刺激を好み、単純作業による活動は見通しも立ちやすく、安定して活動に参加できる。
②生活に生きる	必要な知識・技能の獲得とともに、生活上の望ましい習慣・態度の形成を図るものであり、身に付けた内容が生活に生かされるもの	・全身を使った「引く・押す」の動作により、身体の調整力がつき、安全に生活する身体的基础が養われる。また、刃物やその他の道具の安全な活用について学ぶことができる。
③目標・課題意識	児童生徒が目標をもち、見通しをもって、単元の活動に積極的に取り組むものであり、目標意識や課題意識を育てる活動を含んだもの	・作品を作るという目的（単元のおしまい）は見通しがもて、時間毎に活動内容を知って意欲的に取り組んでいる。
④主体性・共同性	一人一人の児童生徒が力を発揮し、主体的に取り組むとともに、集団全体で単元の活動に共同して取り組めるもの	・個々の活動については、見通しをもち、できる作業が増えるなど主体的に活動できる場面が増えた。集団としては作品の販売学習として計画的に取り組んだが、役割分担が曖昧で個人活動になりがちであった。
⑤活動の組織と生活のまとめ	各単元における児童生徒の目標あるいは課題の成就に必要な活動で組織され、その一連の単元の活動は、児童生徒の自然な生活としてのまとめのあるもの	・量や道具の工夫を行うことで、個に応じた習熟度の別の活動が可能である。《切る、磨く、塗る、彫る、棒に刺して積み上げる》を個々に取り組むことで作業全体が捉えやすくなり、お互いの活動が刺激になって取り組めた。
⑥多種多様な経験	豊かな内容を含む活動で組織され、児童生徒がいろいろな単元を通して、多種多様な経験ができるように計画されていること	・製作過程で、複数の道具を使った作業が含まれていることや、作品の販売学習で、校内放送や販売学習による他学部や職員との交流も含むことができた。
⑦その他	他機関との連携	・近隣の施設に作品の販売を通して、連携を進めている。

<特徴>

さまざまな道具を使って作業をし、それを販売学習につなげる生活単元学習です。活動の一連の流れを理解し、多様な経験をしながら作品を作り上げました。

さまざまな道具の使い方を知ったり、実際に使ったり、仲間との役割分担を経験したりしました。販売学習でもいろいろな人との交流ができました。

生活単元学習



クリスマスツリーを作る中で、さまざまな動作を経験し、生活の中で使うさまざまな道具を活用する力につながりました。

各教科等を合わせた指導

生活単元学習



授業名

スポーツフェスタ 2013

児童生徒の様子（中 BC段階）

- ・ 2、3年生は学級を超えた友だちの良さに気づき、頑張る友だちの姿に触発されて自分の思いを表現できるようになってきた
- ・ 1年生は人との関わりの中でマイナス面が残ってしまうなど課題がある。
- ・ 多くの生徒が身体を動かすことが好きである。

児童生徒にねがう姿

- ・ 友だちと一緒に取り組む中で、友だちの良さ、自分の良さに目を向け自己肯定感を高めたい。
- ・ 体験的な活動を通して自分の思いを相手に伝える経験を積み上げたい。
- ・ 自分の役割を知り、意欲的に活動に取り組んでほしい。

単元の目標

- ・ 同じ学級や他学級の友だちのことを考えながら、一緒に楽しめる競技や必要な道具を考えたり意見を出したりする。
- ・ ペア学級で応援に必要な歌や応援旗、ユニフォームなどを考えて製作する。
- ・ リハーサルや練習を通して友だちと一緒に身体を動かすことを楽しむ。

本時の目標

- ・ 全員のデザインを使って1つの「ペアクラス旗」を作る方法を考えたり、意見を出したりすることができる。
- ・ ペア学級の友だちの好きなものを旗の中に描きこむことができる。
- ・ デザインの写し方がわかり、全員で「ペアクラス旗」を作ることができる。

授業の流れ

- ① あいさつ
- ② 活動内容の確認
- ③ 前回の活動『巨大パズル作り』の振り返り
- ④ 「ペアクラス旗」の作り方
- ⑤ ペア学級からの手紙を読む。
- ⑥ 役割分担
- ⑦ デザイン画を布に写す。
- ⑧ 「ペアクラス旗」の色塗り
- ⑨ 出来上がった「ペアクラス旗」を見て振り返り
- ⑩ 片づけ
- ⑪ あいさつ





生活単元学習 考慮する点



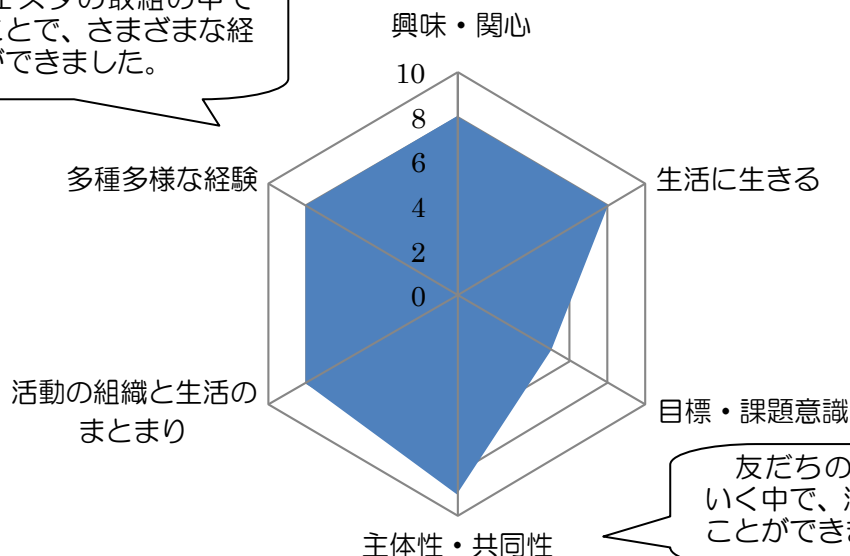
児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際の・総合的に学習するもの		
① 興味・関心	実際の生活から発展し、児童生徒の知的障害の状態等や興味・関心などに応じたものであり、個人差の大きい集団にも適合するもの	・興味・関心の高いスポーツを題材に、自信をもって取り組める製作活動も取り入れた。幅のある学習集団であったが、ペア学級での取組を取り入れ、お互いを認め合う機会になった。
② 生活に生きる	必要な知識・技能の獲得とともに、生活上の望ましい習慣・態度の形成を図るものであり、身に付けた内容が生活に生かされるもの	・同年齢の友だちと共に活動することで、他のグループの友だちを学級の授業に招待するなど仲間関係が広がるきっかけとなった。日常場面でも自ら友だちに関わろうとする姿が増えた。
③ 目標・課題意識	児童生徒が目標をもち、見通しをもって、単元の活動に積極的に取り組むものであり、目標意識や課題意識を育てる活動を含んだもの	・個人や学級に全体の役割を分担したことで個々の目標が意識できた。実態の違う友だちとの活動を考えることは難しい面もあったが、友だちの様子を見たり考えたりすることで、新しい競技へのイメージを広げる活動となった。
④ 主体性・共同性	一人一人の児童生徒が力を発揮し、主体的に取り組むとともに、集団全体で単元の活動に共同して取り組めるもの	・ペア学級の競技だけではなく、グループごとに取り組んでいる体育の内容や、全員で取り組める活動を入れたことで、同じ学部の仲間でお互いを励まし合い、自信をもって普段以上の力を発揮できる生徒がたくさんいた。
⑤ 活動の組織と生活のまとまり	各単元における児童生徒の目標あるいは課題の成就に必要なかつ十分な活動で組織され、その一連の単元の活動は、児童生徒の自然な生活としてのまとまりのあるもの	・準備期間とリハーサル、本番を含め1か月程度の単元となった。準備や練習の中で期待感を高め、本番を迎えることができた。
⑥ 多種多様な経験	豊かな内容を含む活動で組織され、児童生徒がいろいろな単元を通して、多種多様な経験ができるように計画されていること	・本番を迎えるまでに、「ペアクラス旗」や応援歌、ペア競技に使う道具の製作や情報機器を使ってアピールビデオを作る活動、司会やナレーション等多様な活動に取り組めた。

<特徴>

ペア学級の取組を中心に製作やスポーツを展開する生活単元学習です。活動を通し、相手のことを意識して考える経験を積むことができました。

生活単元学習

スポーツフェスタの取組の中で役割を果たすことで、さまざまな経験を積むことができました。



友だちのことを意識して考えていく中で、活動に主体的に取り組むことができました。

各教科等を合わせた指導

生活単元学習

授業名

のりもののらんどをひらこう



児童生徒の様子（小 BC 段階）

- 1 年生（2 名）、2 年生（1 名）、3 年生（1 名）、5 年生（2 名）、6 年生（1 名）の集団である。
- 困った時に自分から何も言えずに黙っていることが多い。
- 自発的に集団でルールのある遊びをすることは少ない。
- 和太鼓やベルなどのリズム遊びが大好きである。

児童生徒にねがう姿

- 場所や物を共有し、友だちや教師と関わって遊ぶ体験を積み上げたい。
- 手先を使いながら、楽しく遊び道具を作ってほしい。
- 係や役割を自分から希望したり、困った時に自分から困っていることを伝えたりしてほしい。

単元の目標

- 友だちと一緒に楽しく電車ごっこの遊びをすることができる。
- 切符を購入したり、改札を通ったりして相手とのやりとりをすることができる。
- 段ボールや画用紙などを使い、電車を作ることができる。

本時の目標

- 自分で作った電車で楽しく電車ごっこ遊びができる。
- 友だちや先生とのやりとりを楽しむ。
- 感想や自分の思ったことや意見をみんなに向かって言うことができる。

授業の流れ

- ① はじめのあいさつをする。
- ② 自分で作った電車を発表する。
- ③ 電車や乗り物の歌を歌う。
- ④ 今日のめあてを聞く。
- ⑤ 役割を聞き、決める。
- ⑥ 電車ごっこ遊びをする。
- ⑦ 後片付けをする。
- ⑧ 思ったことを発表する。
- ⑨ まとめをする。
- ⑩ 終わりのあいさつをする。





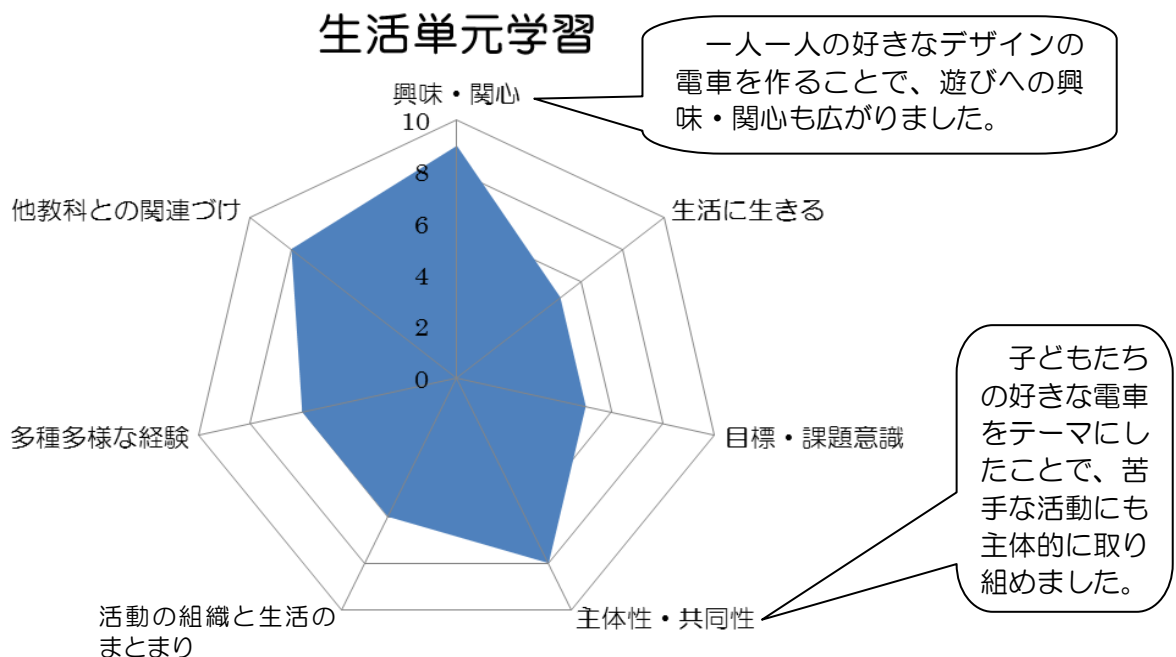
生活単元学習 考慮する点



児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際の・総合的に学習するもの		
① 興味・関心	実際の生活から発展し、児童生徒の知的障害の状態等や興味・関心などに応じたものであり、個人差の大きい集団にも適合するもの	- 乗り物に関心の高い児童が複数おり、活動を通して興味を共有することができた。 - 役割分担して取り組んだことで学習後の活動に広がりが見られた。
② 生活に生きる	必要な知識・技能の獲得とともに、生活上の望ましい習慣・態度の形成を図るものであり、身に付けた内容が生活に生かされるもの	公共交通機関の利用について模擬的な活動を通してルールを守ること等の学習にもつなげやすい。
③ 目標・課題意識	児童生徒が目標をもち、見通しをもって、単元の活動に積極的に取り組むものであり、目標意識や課題意識を育てる活動を含んだもの	駅員役、車掌役、客役等の役割をすることで友だちとの間でやりとりの機会がとれる。
④ 主体性・共同性	一人一人の児童生徒が力を発揮し、主体的に取り組むとともに、集団全体で単元の活動に共同して取り組めるもの	思い通りの活動は難しいが児童の実態に合わせて事前準備することで、児童が主体的に作業に関われる。
⑤ 活動の組織と生活のまとまり	各単元における児童生徒の目標あるいは課題の成就に必要なかつ十分な活動で組織され、その一連の単元の活動は、児童生徒の自然な生活としてのまとまりのあるもの	個々で遊ぶことが多かった子どもたちが友だちとの関わりをもちながら遊ぶことの楽しさを経験することで日常生活につなげることができる。
⑥ 多種多様な経験	豊かな内容を含む活動で組織され、児童生徒がいろいろな単元を通して、多種多様な経験ができるように計画されていること	手指を動かす作業や人とのやりとり、公共交通機関の利用の仕方のシミュレーション等の活動設定ができる。
⑦ その他	他教科と関連づけが明確であること	児童の実態に合わせて算数、図工、社会との関連づけを行う。

<特徴>

子どもたちの興味を引き出しながら、遊びや友だちとの関わりへ活動を広げていく生活単元学習です。公共交通機関の利用を視野に入れた内容を、遊びを通して学びました。



特別活動

各教科等を合わせた指導

生活単元学習



授業名

全校たてわり活動

児童生徒の様子（高 C段階）

学級において子どもたちが主体的に集団づくりをできるようにしている。グループで起きたさまざまな問題について、「グループ集会」で仲間の問題として捉え、自分たちで解決できるようにしている。

その上で、大きな行事を計画から実行、まとめまで主体的に取り組めるようになり、個々の自己肯定感と合わせて、お互いを認め合い、育ち合う集団となっている。

児童生徒にねがう姿

- 自分たちの交流であることを意識し、主体的に活動する。
- 計画―実行―まとめを行う中で、話し合いを通して合意形成する力や、問題を自分たちで解決する力を育てる。
- 相手の立場に立って教え導く、間接的な関わりを意識できるようになる。

単元の目標

- 自分たちの交流であることをふまえて、主体的に活動に参加し、計画から実行、まとめまでやりきる。
- 小学部生をケアしたり、教え導いたりする経験をし、人間関係の幅を広げたり、深めたりする。

本時の目標

- 自分たちで準備をすすめてきた交流を、自分たちも楽しみながら、責任をもってやりきる。
- 友だちと協力して、良い交流にする。
- 小学部生の気持ちを考えながら、仲良く活動する。

授業の流れ

- ① はじまりのあいさつ
 - ペアの児童の隣に座る。
- ② 活動の流れの紹介
- ③ うた
 - 「大阪うまいもののうた」（手遊び）
 - 「世界中の子どもたちが」（歌）
- ④ ゲーム
 - デカパンリレー（ゲーム紹介～見本～ゲーム）
 - マットとり（ゲーム紹介～見本～ゲーム）
- ⑤ ティータイム
 - 準備をする
 - ティータイム
- ⑥ おわりのあいさつ
 - 感想インタビュー
 - 教室に児童を送り届ける。





生活単元学習 考慮する点



児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実践的・総合的に学習するもの

① 興味・関心	実際の生活から発展し、児童生徒の知的障害の状態等や興味・関心などに応じたものであり、個人差の大きい集団にも適合するもの	・小さな子ども達を教え導くことや高等部生としてあこがられる存在になることは、発達及び生活年齢的にも興味・関心のもてる経験であり活動である。
② 生活に生きる	必要な知識・技能の獲得とともに、生活上の望ましい習慣・態度の形成を図るものであり、身に付けた内容が生活に生かされるもの	・障害理解学習や性教育で学んだ内容を実際の学習の中で活かす工夫をしている。卒業後の人生への見通しと自信へとつなげられる意味合いをもつ学習である。
③ 目標・課題意識	児童生徒が目標をもち、見通しをもって、単元の活動に積極的に取り組むものであり、目標意識や課題意識を育てる活動を含んだもの	・繰り返しの中で見通しをもち、自信をつけ、積極的に活動に向かっている。単元のみならず、人生の中での意味合いをもたせることで、目的意識や課題意識を育てる活動としている。
④ 主体性・共同性	一人一人の児童生徒が力を発揮し、主体的に取り組むとともに、集団全体で単元の活動に共同して取り組めるもの	・生徒の実態に応じて、指導者の支援は必要最低限としている。小学部の子どもたちに楽しんでもらう、というベースの目的意識は学級で共有できており、共同して取り組めた。
⑤ 活動の組織と生活のまとまり	各単元における児童生徒の目標あるいは課題の成就に必要なかつ十分な活動で組織され、その一連の単元の活動は、児童生徒の自然な生活としてのまとまりのあるもの	・繰り返しの中で主体的に活動できている。小学部生に教え導くだけでなく、学級内でも1、2、3年生が在籍していることで、教えたり教えられたりの関係性が生まれ、育ち合うことが出来ている。
⑥ 多種多様な経験	豊かな内容を含む活動で組織され、児童生徒がいろいろな単元を通して、多種多様な経験ができるように計画されていること	・ゲームやティータイム等のさまざまな活動を取り入れた。
⑦ その他	他の学習との密接に関連づけが明確であること	・進路学習、障害理解学習、性教育等、他の学習と系統性をもたせて学習を進めている。

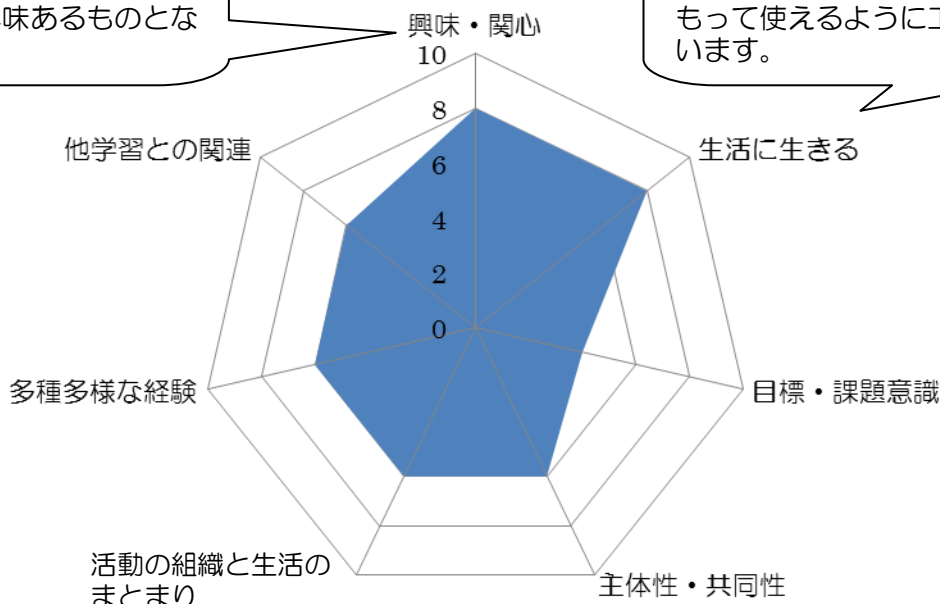
<特徴>

小学部と高等部の交流学习を、高等部の生活単元学習として取り組んだ学習です。進路学習や障害理解学習、性教育等他の学習と系統性をもたせながら学習を進めているのが特徴です。

小学部の子どもたちをリードする活動は高等部の子ども達にとって興味あるものとなりました。

生活単元学習

卒業後を見据え、学んだ内容を実際の生活の中で自信をもって使えるように工夫しています。



生活単元学習

授業名

みんなを助けるテレビ番組を作ろう（火事・洪水・地震）

児童生徒の様子（高 BC段階）

- ・年に数回の避難訓練の取組だけで、「災害から自分の身を守る」という意識をもちにくい。
- ・テレビに関心があり、よく見ている生徒が多い。
- ・自分のことが中心であり、他者に自分から関わったり、周りを意識して活動したりする力が弱い。

児童生徒にねがう姿

- ・テレビ番組を作ることを目的に、災害時の避難方法のロールプレイを行うことで、「自分の身を守る」という意識を高めてほしい。
- ・テレビ番組の作成を通して、タイムキーパーや進行等の自分の役割を果たしてほしい。
- ・班で協力して一つの番組を作り上げたり、調べ学習で施設の人に質問したりすることでコミュニケーション力や社会性を高めてほしい。

単元の目標

- ・火事・地震・洪水の怖さを知り、そこから身を守る意識を高める。
- ・テレビ番組作成の中で、タイムキーパーや進行等のグループの役割を果たす。
- ・話し合いの中で、自分の意見を発表したり、友だちの意見を聞いたりする。

本時の目標

- ・災害の一つである洪水を知る。
- ・災害時には欠かせない非常口への意識を高めることができる。
- ・教師が作成したテレビ番組を見ることで、作成するテレビ番組のイメージを高めることができる。
- ・グループ内でタイムキーパーや進行等の役割を決めて非常口を探すことができる。
- ・班活動での進め方を経験することができる。

授業の流れ

- ① あいさつ
- ② 教師が作成したニュース番組を見る。
- ③ 洪水のビデオを見て「災害」について知る。
- ④ 校内の非常口マーク探しのために、グループで役割を決める。（進行・タイムキーパー・写真係など）
- ⑤ 校内の非常口マークを探す。
- ⑥ グループ毎に校内の非常口マークの個数を発表し合う。
- ⑦ 教師からの評価
- ⑧ あいさつ





生活単元学習 考慮する点



児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際の・総合的に学習するもの		
① 興味・関心	実際の生活から発展し、児童生徒の知的障害の状態等や興味・関心などに応じたものであり、個人差の大きい集団にも適合するもの	- 余暇はテレビを見て過ごしている生徒が多く、テレビ番組に関心が高い。 - 生徒に応じて興味・関心のある役割を設定できる。
② 生活に生きる	必要な知識・技能の獲得とともに、生活上の望ましい習慣・態度の形成を図るものであり、身に付けた内容が生活に生かされるもの	- 避難訓練の延長でもあり、自分の身の守り方のスキルを学べる。 - 班活動や施設見学などを通して、他者とのコミュニケーションの機会が増え、社会性を身に付けられる。
③ 目標・課題意識	児童生徒が目標をもち、見通しをもって、単元の活動に積極的に取り組むものであり、目標意識や課題意識を育てる活動を含んだもの	- 全校発表会を目標に班で1つのものを作り上げる。 - 調べ学習を経て番組という形に作り上げるものであり目的意識をもちやすい。
④ 主体性・共同性	一人一人の児童生徒が力を発揮し、主体的に取り組むとともに、集団全体で単元の活動に共同して取り組めるもの	班で1つの番組を作るため(1人1役)、全員の活躍がないと成り立たないものであることから、1人1人が役割をもつことができる。
⑤ 活動の組織と生活のまとめ	各単元における児童生徒の目標あるいは課題の成就に必要な活動で組織され、その一連の単元の活動は、児童生徒の自然な生活としてのまとめのあるもの	班活動を主にして取り組むため、周りの友だちと協力したり、周りに合わせて自分の気持ちを調整したり等、多くの生徒の目標、課題である社会性を育てるものとして期待できる。
⑥ 多種多様な経験	豊かな内容を含む活動で組織され、児童生徒がいろいろな単元を通して、多種多様な経験ができるように計画されていること	地域の施設(防災センター)に行くことで、施設や公共交通機関の利用や支払いの経験を積むことができる。
⑦ その他	地域の施設、交通の利用	- 過去をみても、水害(災害)の被害が多い地域であり、自分たちの地域の特性や身の守り方の指導が必要である。 - 地域に防災センターがあり、災害について体験し、学習できる施設の利用が可能である。

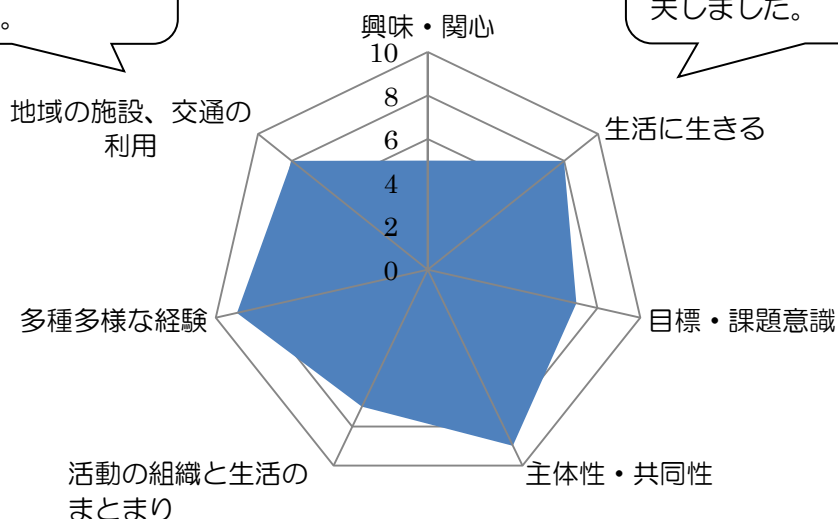
<特徴>

生徒の興味・関心があるテレビ番組を題材に、生徒自身が番組を制作する取組です。災害から身を守る意識を高めることをテレビ番組のテーマに設定し、生活上望ましい生活習慣や態度を身に付けることを目指しました。

災害に関する学習の中に調べる、時間を計る、目的地へ移動する等の幅広い活動を組合せました。

生活単元学習

災害から身を守る意識を高めつつ、テレビ番組の作成に意欲をもてるよう授業内容を工夫しました。



児童生徒の様子（高 BC段階）

- ・本学級は非定型自閉症2名、自閉症1名、ADHD1名、肢体不自由1名の男子5名である。
- ・友だちのことを意識したり、コミュニケーションを取ったりでき、明るい雰囲気のある学級である。しかし、初めてのことや、慣れない活動には不安を感じる人が多い。

児童生徒にねがう姿

- ・1年生は、初めての高校生との交流会に向けての見通しや期待感をもってほしい。2, 3年生は、昨年度、一昨年度経験したことを思い出し、期待感を持ち、交流の相手が喜んでくれることを考えながら話し合いや練習に参加してほしい。
- ・交流会が終わった後に、「楽しかった」「また来年が楽しみ」と成功体験を感じてもらいたい。

単元の目標

- ・高校生の交流会が楽しく達成感をもって終われるように、協力して取り組むことができる。
- ・司会やあいさつの役割をもつことで、話すことに自信をもつことができる。
- ・友だちの頑張りを見たり聞いたりすることで、お互いの良さを知り合うことができる。

本時の目標

- ・どうしたら相手が喜ぶのかを意識しながら、取り組むことができる。
- ・友だちの頑張りを見て、評価ができる。

授業の流れ

- ① はじめのあいさつをする。
- ② 高校生の交流会の内容を確認する。
 - ・スライドを見て、重要なポイントを知る。
- ③ 学級の出し物を確認する。
- ④ 出し物の練習をする。
 - ・ダンス、縦笛、短歌、歌
- ⑤ 友だちの出し物のがんばりを評価する。
 - ・あらかじめ決めた評価の基準を基に、札をあげて友だちの出し物の評価をする。
- ⑥ おわりのあいさつをする。





生活単元学習 考慮する点



児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際の・総合的に学習するもの

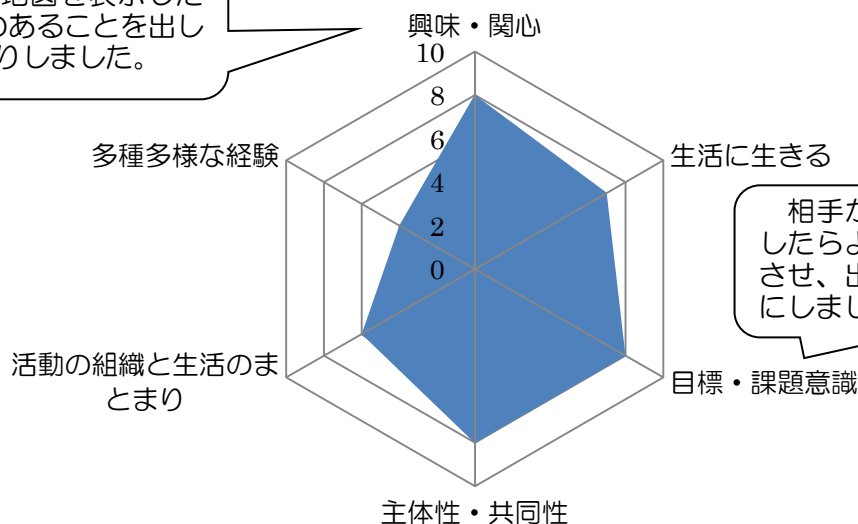
① 興味・関心	実際の生活から発展し、児童生徒の知的障害の状態等や興味・関心などに応じたものであり、個人差の大きい集団にも適合するもの	・自分の得意なことや音楽の授業で取り組んだものの中から、自分のやりたいことを発表する場面を作ったことで、興味をもって活動でき、個人差が大きい集団でも取り組みやすかった。
② 生活に生きる	必要な知識・技能の獲得とともに、生活上の望ましい習慣・態度の形成を図るものであり、身に付けた内容が生活に生かされるもの	・自分の身近な地域から交流の友だちが来るということを理解するために、自分の住んでいる所と、交流の高校がどこにあるかを京都府の地図を使って説明をし、教室にも掲示したことで普段の会話にもつながった。
③ 目標・課題意識	児童生徒が目標をもち、見通しをもって、単元の活動に積極的に取り組むものであり、目標意識や課題意識を育てる活動を含んだもの	・交流会で楽しみなことや、頑張ることを初めに聞き取り、それを掲示したことで見通しをもつことができた。休み時間など、授業の場以外でも発表の練習をする姿が見られ、課題意識ももつことができた。
④ 主体性・共同性	一人一人の児童生徒が力を発揮し、主体的に取り組むとともに、集団全体で単元の活動に共同して取り組めるもの	・一人一人が自分の得意なことを活かす活動を入れたことで、力を発揮し、主体的に取り組むことができた。また、司会や挨拶など一人一役とすることで、集団で成功させようという意識をもつことができた。
⑤ 活動の組織と生活のまとめ	各単元における児童生徒の目標あるいは課題の成就に必要なかつ十分な活動で組織され、その一連の単元の活動は、児童生徒の自然な生活としてのまとめのあるもの	・課題の成就に必要なかつ十分であったかは、事後学習も大事にし、事後でももっと活発な活動をすべきだったという点で反省がある。 ・行事単元ということで、それに向けて取り組むという自然な生活としてのまとめのあるものであった。
⑥ 多種多様な経験	豊かな内容を含む活動で組織され、児童生徒がいろいろな単元を通して、多種多様な経験ができるように計画されていること	・自分の地域のことを知ったり、自分の得意なことを発表したりと多様な活動であった。

<特徴>

例年実施している交流会をとりあげた生活単元学習です。子どもたちの興味・関心のあることを出し物にしたり、学級として主体的に出し物に練習に取り組めるように ICT を活用したり、子どもたち相互の評価の規準を明確にしたりと工夫した点が特徴です。

生活単元学習

交流先の高校がどこにあるのか分かるように地図を表示したり、興味・関心のあることを出し物の内容にしたりしました。



相手が喜ぶためには何をしたらよいのかを十分考えさせ、出し物の目的を明確にしました。

資料Ⅰ C Tを活用した教育の情報化と障害に応じた教材教具のあり方について



～タブレットP Cを活用した取組～

ICT(Information and Communication Technology)とは

コンピュータや情報通信ネット

ワーク(インターネット等)などの情報コミュニケーション技術

障害のある子どもたちのICTを活用した教材教具について

特別支援学校においては、児童生徒の学習を効果的に進めるため、児童生徒の障害の状態等に応じてコンピュータ等の教材・教具を創意・工夫するとともに、それらを活用しやすい学習環境を整えることが大切である。

これらのコンピュータ等の教材・教具を有効、適切に活用するためには、教師はそれぞれの教材・教具について慣れ親しみ、絶えず研究するとともに、校内のICT環境の整備に努め、児童生徒も教師もいつでも使えるようにしておくことが重要である。

視覚障害

凸図や模型などの触覚教材や音声教材を活用して視覚的な情報を触角や聴覚で把握できるようにしたり、モデル実験を行ったりする。児童生徒がコンピュータ等の情報機器や障害の状態に応じた周辺機器を活用できるようにしたり、情報通信ネットワーク等を活用したりすることによって、視覚的な情報の入手が困難であるという視覚障害に伴う困難を補って、問題解決的な学習等に主体的に取り組むことができるようにする。

※タブレットP Cには、VoiceOver(読み上げ)やズーム、色を反転するなどの機能を備えるものがあり、視覚面で課題のある児童・生徒も有効に利用することができると考えられる。

聴覚障害

可能な限り、視覚的に情報が獲得しやすいような種類の教材・教具や楽しみながら取り組めるようなソフトウェアを使用できるコンピュータ等の情報機器を用意し、これらを有効に使用できるような工夫が必要である。特にP Cなどの情報機器は音声による操作面での課題が少なく、成人後のコミュニケーション手段としても有効活用できることが予想されるため早い段階から操作・活用の習熟が期待されている。

※タブレットP Cには、bluetooth 機能で音声を補聴器に届けたり、動画に字幕とキャプション(説明文、見出し)をつけたりするなどの機能を備えるものがあり、聴覚面で課題のある児童・生徒も有効に利用することができると考えられる。

肢体不自由

筆記の困難な児童生徒については筆記用自助具や筆記の代替えをするコンピュータと及び児童生徒の身体の動きの状態に対応した入出力機器等があげられる。補助用具や補助的手段の使用の是非は、児童生徒の身体の動きや意思の表出等の状態やその改善の見通しに基づいて、慎重に判断し、将来、改善が見込まれる児童生徒については、自立活動の指導との関連を図りながら、指導を行うようにし、補助用具や補助的手段を適切に活用することが大切である。

※タブレットP Cには、AssistiveTouch 機能を利用することによってタッチやスワイプなどの代表的な操作を簡易に実行することが可能となり、身体機能面で課題のある児童・生徒も有効に利用することができると考えられる。



教育の情報化

情報化の進展に対応した学習内容や指導形態の改善、学校組織や校務の改善、学校への支援体制づくりなどを通して教育の質の向上を目指すもので、以下の3つから構成されている。

情報教育

児童生徒の情報活用能力の育成

教科指導におけるICT活用

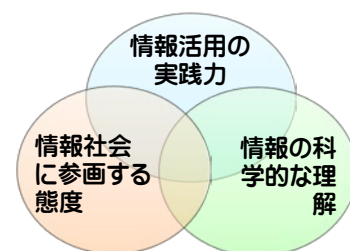
各教科等の目標を達成するための効果的なICTの活用

校務の情報化

教員の事務負担の軽減と児童生徒と向き合う時間の確保

情報教育の目標

「情報教育」は児童生徒自らが考え、主体的に判断・表現・行動する等、児童生徒が主体的に学ぶための「情報活用能力」を育てることを以下の3つの観点から整理しています。



病弱

児童生徒の実態に応じて、教材教具を工夫したり、入出力支援機器や電動車いす等の補助用具を活用したりするなどして、学習に主体的に参加し、作業や操舵等を行い学習効果が高められるように指導することが大切である。長期療養で体験が不足し、具体的な事物が理解できない場合には、視聴覚機器や視聴覚教材を効果的に使用したり、体調が悪く教室に登校できない場合には、テレビ会議システム等の情報通信ネットワークを活用したりする等、療養中でも、可能な限り児童生徒が学習することができるよう工夫することが必要である。

※タブレットPCに利用可能なアクセサリを使用することによって様々な姿勢からでも操作を行うことが可能となり、配線が不要なことで使用する場所の制限が少なくなる。また機内モードを設定することで不要な電波を遮断することが可能となり医療器具への心配もなくなるため、病弱の児童生徒でも安心・有効に利用することができると考えられる。

知的障害

一人一人の児童生徒の知的障害の状態や経験、興味・関心等を踏まえるとともに、使いやすく効果的な教材・教具を用意したり、実生活への活用がしやすくなるように、できるだけ実際に使用する用具などを使ったりすることが重要である。補助用具の活用に当たっては、活動を効果的に補助したり、児童の持っている力を十分に発揮したりすることができるようにするための工夫が重要である。自力で取り組むことを目的に補助用具を取り外す場合は、段階的に進めるなどして、児童生徒の負担を考慮することが大切である。コンピュータ等の情報機器などの活用により、児童の意思表示をより明確にしたり、数や文字を効果的に指導したりすることができることから、児童の知的障害の状態等や経験を考慮しつつ、適切な機器を選択して、各教科等の内容の指導において効果的な活用が図られるようにすることが大切である。

※タブレットPCには機能を制限する設定が可能なものもあり、別サイトにリンクを張ってある広告へのタッチを無効にするなど、一部機能を制限することで認知面での課題がある児童・生徒でも安心して利用することができると考えられる。

各教科等を合わせた指導に関する研究の取組

ータブレットPCを活用した研究協議ー

各教科等を合わせた指導に関する研究では、ICT 活用に向けた研修及びICT を活用した教材教具の開発等の研究を進めました。

特にタブレットPCの活用を推進するために、研究のツールとしてタブレットPCを研究協議の際に活用しました。



タブレットPCの活用における研修会を行いました。

研究協議の記録にタブレットPCを活用しました。



<タッチパネルでの操作> タップ

パソコンで言うクリック

ダブルタップ

パソコンで言うダブルクリック

ピンチアウト

二本指を置いたまま、その指を広げて拡大画面にする。

ピンチイン

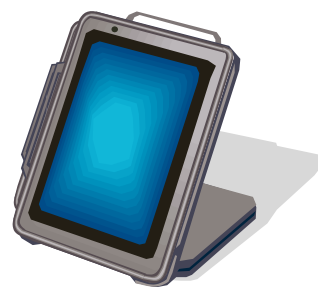
二本指を内側に縮めて画面を縮小する。

フリック

タップと同時に指をずらす。

スワイプ

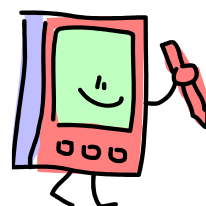
指で端から端まで掃くような動作をする。



各教科等を合わせた指導に関する研究におけるタブレットPC活用例

- ・ プロジェクターにつないでプレゼンテーション
- ・ 研究協議記録等を撮影して共有
- ・ 研究協議においてタイマーとして活用

等





タブレットPC を活用した指導事例

タブレットPCで何ができるのか？

通常のノートパソコンやデスクトップ型よりもタブレットPCが普及するその要因は「使いやすさ」である。

はじめての子どもでもほとんど直感的に扱える（画面切り替え、ズーム等）操作性とコンセントやLAN ケーブルを必要としない保管と設置の容易さがポイントである。

今後タブレットPCが普及することによって、種々の障害をもつ子どもたちがその豊富なアプリによって学校生活だけでなく日常生活を充実させることが予想される。

教師はその事実を見据えて指導・活用する力が求められるのではないだろうか。

<活用アイデアの紹介>

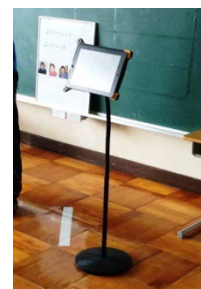
- ・ 観察日記を書くために、栽培している植物の画像を撮る。
- ・ 授業の振り返りのために、活動の様子をビデオ撮影する。
- ・ 声の大きさを測定する。
- ・ 騒音を測定する。
- ・ 美術の授業で作成した作品の画像を撮り、振り返りに活用する。
- ・ 音楽を聴く。
- ・ 視能訓練として活用する。
- ・ 拡大鏡として活用する。
- ・ 読み上げソフトを使って、日程の確認をする。
- ・ 丁寧な掃除の仕方を動画で学ぶ。
- ・ 体育のマット運動や跳び箱での動きを動画で撮影する。
- ・ 国語の漢字の学習で漢字の成り立ちや書き順を学習する。
- ・ フラッシュカードとして活用する。 等

<タブレットPC付属品の紹介>

★指のかわりに外部スイッチでタブレットPCをタッチするためのユニットです。



★タブレットPCをフレキシブルに固定できるスタンドです。



指導助言 佛教大学 准教授 菅原 伸康

教師は、「子ども主導の授業」、「子ども主導の係わり合い」と言いながらも、子どもの手を突然引っ張り、子どもにしっかりと聞くこともせず「さあ、時間だからトイレだ。」と独り言のように言いながらトイレに連れて行き、終わるとどこに行くかも伝えずに再び手を引っ張り目的地に連れて行くということを、日常的にあたり前のようにやっていないでしょうか？

また、単元を組むときなど「何をいつまでに消化するか」ということが先に求められて、その後を子どもが教師に引っえられるように進んではいけないでしょうか？教師の都合で、実態に合っていないことをやらされて「ねばり強く…」もどこか違うような気がします。

子ども自身が本当にやりたいと思ったら自然にやるようになるのではないのでしょうか？

自分自身にも身に覚えのあることであるにもかかわらず、そのことを忘れて子どもに無理強いをしてしまうのです。

目の前にいる子どもを 100%ありのままに認め、受け入れ、子どもたちが「伸びやすい」ように「その子どもの良さ」が出てくるように支援・指導をすることが、教師ができる精一杯のことではないでしょうか。

「教師主導」で授業や係わり合いがなされていないか、下記の 11 項目で自分の実践を振り返り、理論的根拠を求めてみてください。

1. 子どもは能動的であったか
2. 子どもが自分でやる部分があったか
3. 教師と子ども、活動を分かち合うことはできたか
4. 子どものイニシアチブはあったか
5. 教師と子ども、子どもと子どもの双方向のやりとりはあったか
6. 子どもの分かるプロセスはあったか
7. 教材教具の工夫・活用がなされていたか
8. 活動に文脈・流れはあったか
9. 何か新しいこと (SOMETHING NEW) はあったか
10. 教師のアドリブはいかされていたか
11. 教師もときめき、わくわくしたか



その子どもの障害に目を向けるのか？教師の指導力に目を向けるのか？

子どもの障害に目を向ければ、「この子どもは知的障害があるから」、「この子どもは障害が重いから」というように、指導力のなさを子どもの障害のせいにしてしまいます。

教師の指導力に目を向ければ、「この子どもはどこでつまづいているのか」、「それを解決するにはどういう教材で、どのように指導すればよいのか」を考えるようになります。

反省的实践者としての省察を忘れず、授業や係わり合いを、子どもの興味・関心や得意な面を考慮し、目的が達成しやすい段階的な指導から、未だ経験したことのない、また成功経験をしたこともないような興味・関心のない事柄に取り組ませ、結果として興味・関心を抱いて取り組めるようになる教育的対応を行う授業を子どもとともに創造していただきたいものです。

おわりに

「各教科等を合わせた指導」ガイドブックでは、各教科等を合わせた指導に関わる課題を研究プロジェクトメンバーから聞き取るとともに、課題解決のための意見を集約し、合わせて研究プロジェクトメンバーが積み重ねた研修内容について各教科等を合わせた指導の概要としてまとめました。

また、各校が実際に取り組んだ授業をサンプルとして、考慮する点を参考に協議を行い、授業を見直したり、改善を図ったりすることで、各教科等を合わせた指導のスタンダードを共有し、その検討を経たサンプルを授業モデルとして提案しました。

これらの授業モデルは、一つのモデルを2枚のシートにまとめましたが、検討の中では、「どのような子どもたちに」「どのように取り組み」「子どもたちがどのように成長したか」という内容の共有に努め、「考慮する点」に焦点を絞って意見交流をしました。「この授業で何を大切にしたいか」というポイントをレーダーチャートで示し、特色を示すための検討を通して、授業改善のヒントを見いだすこともできました。

この授業モデルを「各教科等を合わせた指導」のイメージを共有するためのサンプルとして捉え、これらのサンプルを参考に、子どもたちの実態に応じたオリジナルの授業づくりに役立てていただけたらと思います。

今後、この「各教科等を合わせた指導」ガイドブックが府立支援学校及び特別支援学級で行われている「各教科等を合わせた指導」の授業をガイド及びサポートする役目を果たすことを期待します。

「各教科等を合わせた指導」の授業の中で、子どもたちの笑顔が輝くことを心から願っています。



参考文献

1. 「障害のある子どものための教育と保育 エピソードで見る障害の理解と支援」(ミネルヴァ書房 2012 年) 佛教大学 菅原伸康准教授
2. 「障害のある子どものための教育と保育 写真で見る障害のある子どものための課題学習と教材教具」(ミネルヴァ書房 2012 年) 佛教大学 菅原伸康准教授
3. 「特別支援教育を学ぶ人へ」(ミネルヴァ書房 2012 年) 佛教大学 菅原伸康准教授
4. 特別支援学校 教育要領・学習指導要領
5. 特別支援学校学習指導要領解説 総則等編(幼稚部・小学部・中学部)
6. 特別支援学校学習指導要領解説 総則等編(高等部)
7. 特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編
8. 「特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関する研究」岩手県立総合教育センター
9. 「特別支援学級経営の手引」(25 年度版) 岩手県立総合教育センター
10. 「特別支援教育指導資料第 21 集・第 22 集・第 24 集」群馬県総合教育センター特別支援教育センター
11. 「特別支援学級(固定学級・通級による指導)教育課程編成の手引」東京都教育委員会
12. 「特別支援学校の魅力ある授業づくり」(平成 23・24 年度随時作成) 静岡県総合教育センター
13. 「特別支援学級担任のためのハンドブック」岡山県総合教育センター
14. 「生活単元学習・作業学習の進め方 Q & A」(ケーアンドエイチ 2009 年) 千葉大学教育学部附属特別支援学校編
15. 「特別支援教育の基礎・基本」国立特別支援教育総合研究所(ジアース教育新社 2009 年)
16. 第 1 回府立特別支援学校高等部における職業教育充実検討のための有識者会議(概要)資料
17. 府立特別支援学校高等部における職業教育充実検討のための有識者会議【意見のまとめ】資料
18. 平成 25 年度特別支援教育<発展>サテライト「各教科等を合わせた指導」講座ー自立する力を育むための授業づくりー講義資料
19. 平成 25 年度研究プロジェクト会議 指導助言資料 佛教大学 菅原伸康准教授
20. 平成 25 年度第 4 回研究プロジェクト会議「教育の情報化」講義資料 府立聾学校 酒井弘 校長
21. 京都府特別支援教育研究協議会「サマプレ」ポスター資料 聾学校 諸持善久 教諭

「各教科等を合わせた指導」ガイドブック 執筆・編集スタッフ

所 属		氏 名	備考
佛教大学	准教授	菅原 伸康	指導助言者
京都府立盲学校	教 諭	吉田 愛	研究協力員
京都府立聾学校	教 諭	諸持 善久	
京都府立向日が丘支援学校	教 諭	上田 和美	
京都府立宇治支援学校	教 諭	水島 豊	
京都府立城陽支援学校	教 諭	河村 英和	
京都府立八幡支援学校	教 諭	伊藤 直	
京都府立南山城支援学校	教 諭	磯部 沙織	
京都府立丹波支援学校	教 諭	細井 靖子	
京都府立中丹支援学校	教 諭	大石 真菜美	
京都府立舞鶴支援学校	教 諭	秋原 美弥子	
京都府立与謝の海支援学校	教 諭	大垣 芳枝	
宇治市立黄檗中学校	教 諭	高間 恵美子	
宇治市立南部小学校	教 諭	松阪 憲彦	
京都府教育庁指導部特別支援教育課	指導主事	田渕 泰史	特別支援教育課
京都府総合教育センター	特別支援教育部長	鋒山 智子	特別支援教育部
京都府総合教育センター	研究主事兼指導主事	野田 基子	
京都府総合教育センター	研究主事兼指導主事	小林 利恵子	

※所属及び職名は、平成 26 年 3 月現在

京都府総合教育センター

「各教科等を合わせた指導」ガイドブック

～子どもたちの笑顔が輝く授業を目指して～

平成 26 年 3 月

京都府総合教育センター 特別支援教育部

〒612—0064

京都市伏見区桃山毛利長門西町

T E L 075 (612) 2953 (特別支援教育部)

F A X 075 (612) 3267